

第一部

1

ブラック。

ラジオ パーソナリティの声。

ラジオ

『悲しい知らせだ。たつたいま、××州の××で大規模な事故が発生したとの知らせが入った。具体的な死傷者数はわからないが、町に残っていた住民の——』

ブラック。

ラジオ

『ほとんどが、絞め殺されたと見られている』

ブラック。

ラジオ

『冥福を祈るよ』

2 回想アノードの家

壁にあいた、親指ほどの小さな穴。少女の眼がのぞく。五歳くらいの少女。穴の向こうは仄暗い小部屋。箱が立ち並ぶ。

大きさは少女の背ほどの、陰湿で硬質な箱。箱だらけの小部屋に、ひとりの中年男。少女、息を殺す。まじまじと彼の姿をのぞく。

よく見るともう一人いる。少女と同じくらいの背の女の子。男は女の子を抱きしめる。髪を撫でる。女の子の伸ばす腕をあたためるように包む。

少女はそれを壁の向こうから見ている。呟く。

少女

「だれなの？」

3 夕方 蔦に覆われた街

夕暮れ。街。パーソナリティの話が続いている。

ラジオ

『良いニュースと悪いニュースがある。良いニュースは、ガスリーのやつが糞番組が今日で最終回だったこと。悪いニュースは、この番組も、それ以外にも、ぜえーんぶ、今日で最終回だったことだ』

道路。びつしりと這う蔦。一面の葉。深緑がアスファルトの地肌を隠す。

ラジオ

『今日の収録が終わったら、局の人間はそろっ

て帰宅。それでぐっすり寝て、明日になったら荷造りをして、明後日にはあてのない宇宙旅行に仲間入りさ。リスナーのみんなも早いところ、地球にお別れしたほうがいい。もっとも、いまだに地上でラジオなんか聴いている人がまともに言うことをきくとは思えないけどね』

果てしなく伸び、絡まりあつたツル。家並み、鉄塔、電線を包む。風。街全体がそよぐ。

ラジオ 『一瞬、思ってみたんだ。このまま、人類がみんな宇宙に行ってしまうても、僕だけは地上に、ここに残ろうかってね』

街の一角、小さな一軒家。街のようすと同様、全面が蕨の緑色に覆われている。窓際に一台のラジオ。パーソナリテイの声はここから。室内には少女コレット(16)。意志のない瞳。ラジオ 『この蕨まみれの放送局に閉じ込められて、死ぬまでラジオを録るんだ。それで、その辺に浮かんでる衛星を使つてさ、宇宙の彼方のみんなに、死ぬまで僕の話をお聴かせてやる——』

コレット、ラジオを切る。

4 夕方アノードの家

コレットのいる部屋。床じゅうに大量の鉢植え。どの植物にも値札。種類さまざま。ただ、そのどれもが普通でない。花卉が固まり葉化したアジサイ、五百ドル。密生した枝が鳥の巣の形に異常発達したサクラ、五百五十ドル。毒々しく変色したポインセチア、八百五十ドル。何倍にも膨れ上がったクレマチス、九百ドル。畸形化した植物たち。

そのひとつひとつに水をやるコレット。

廊下。小部屋の扉が開く。中からアノード(65)が出てくる。髭面に深い目のしわ。腫れぼつたい腕に刺青。扉をバンと閉める。鍵を取り出し、施錠する。もうひとつ施錠する。鉢植えの部屋に向かって声を張る。

アノード 「コレット!」

手が止まるコレット。

アノード 「飯はまだか、コレット」

コレット 「まだ一時間早いじゃない」

アノード 「飯はまだか、と言ってるんだ」

アノード、ダイニングへ。遠慮のない足音。観念して立ち上がるコレット。廊下に出る。廊下の隅に少年エミル(15)を見つける。座りこんで大きな本を開いている。淡々と活字

に目を走らす。

コレット 「エミル、また本を盗んだの？」

エミル 「……」

コレット 「次見つかったら殺されるよ」

5 夕方アノードの家（ダイニング）

薄暗い。窓の向こうには蔦がびっしり。隙間から光。皿をひとつ運ぶコレット。芋のスープ。テーブルに置く。

部屋中の戸棚を開けるアノード。片手に巨大な鞆。棚の中をまさぐり、物を掴んで鞆に投げ入れる。また開ける。鞆に入れる。乱暴に開ける。

コレット 「スープよ」

アノード 「最悪の気分だ」

テーブル前にどかつと腰を下ろすアノード。鞆を放りスープを啜る。対面に座るコレット。片手に小さいパン。ちぎって口に運ぶ。

アノード 「へびもセンザンコウも一銭の足しにもならねえ。アロワナもだ。あの色を作るのにいくら

かかったと思ってるんだ」

コレット 「じゃあ、花も売れないの？」

アノード 「全部捨てちまえ。もう誰も金を手放す気がないらしい。まともな人間はもう地球にいない。いまだに地に足がついてる、ようなやつは、金を貯めて賄賂にでも頼らなきゃ船に乗せてもらえないってわけだ」

コレット 「さつき、××州で、住民が絞め殺されたって」

聞いていないアノード。コレット、鞆に目をやる。

コレット 「出かけるの？ いつ帰ってくるの？」

窓の向こうから凄まじい鳴き声。振り向く二人。再度聞こえる。鳥類の声。

アノード 「エミル！ 庭の鳥を黙らせろ！」

廊下。響くアノードの声。無視するエミル。本を読む。また鳴き声。耳をつんざく。

アノード 「エミル！」

無視するエミル。アノード、床に皿を投げつける。パリンと割れる。飛び散る汁。身震いするコレット。すぐさま席を立つ。

コレット 「私が見てくる」

6 夕方アノードの家（庭）

夕暮れの庭。捨てられたように置かれた鳥籠。中に一羽のオウム。一目でわかる異様な姿態。背中にびっしりと小さなくちばしが生えている。裂くような鳴き声。歩み寄るコレット。

コレット 「ビット？ どこにいるの？」

ビット 「おはよう、コレット」

足元に一台のロボット。犬ほどの大きさ。ボール状の筐体。鳶に絡まれ身動きが取れなくなっている。かがんで鳶を取ってやるコレット。

ビット 「コレット、ありがとう」

コレット 「いつからこうなっていたの？」

ビット 「……」

コレット 「ねえ？」

ビット 「一昨日でしょうか」

コレット 「じゃあもう二日も餌をあげていないのね？」

ビット 「あげましたよ。一昨日には」

コレット 「毎日あげる約束よ」

ビット 「私のせいじゃない」

コレット 「世話のかかる給餌ロボットね」

ビット 「私のせいじゃない」

コレット 「べつに怒ってないわ」

ビット 「捨てないでね、コレット」

コレット 「友達を捨てたりなんかしないわ。ほら早く、お腹を空かせた鳥に二日分のごはんをあげてよ」

Emil が歩いてくる。読んでいた本を、扉の向こう、隣の敷地に投げ捨てる。

ビット 「おはよう、Emil」

コレット 「読み終わったの？」

コレット、片手のパンを出す。半分食べかけ。Emil、受け取って口に詰める。咀嚼しながら腰をおろす。おもむろに鳥籠の扉を開ける。

コレット 「何するの」

Emil 「餌なんかやらなくなっちゃって、逃げばいいんだ」

コレット 「アノードに殺される」

Emil 「殺されないよ。こいつはアノードの失敗作だ。

今更売れっこない」

籠の外に踏み出すオウム。おぼつかなく歩く。鳶に足を取られる。

ビット 「私は反対です」

二人、見る。

ビット 「鳥を逃してしまつと、私の存在意義がなくなります」

鼻で笑うエミル。

ビット 「逃すのはやめてください。コレット、エミルを説得して」

コレット 「大丈夫よ、ビット」

ビット 「お願い、逃がさないで」

コレット 「落ち着いて」

ビット 「私を捨てないで。私にだって権利はあります。交渉もできるんです。コレット。わかりますね？」

コレット 「ビット」

ビット 「私はあなたの秘密を知っています。コレット」

コレット 「ビット！」

エミル、ビットを蹴り飛ばす。吹っ飛ぶビット。

ビット 「痛い！」

コレット 「エミル！」

扉に激突して落ちる。駆け寄るコレット。割れた筐体からオウムの餌がポロポロとこぼれる。

エミル 「こんながらくた可愛がつて、満たされた気持ち

ちになつてどうするんだ？ そいつは機械なんだよ。人間みたいな質感で喋るけど、何も感じないし、何も思っていないんだ。感じたり、思つてふりをしてる、だけなんだよ。全部茶

番だよ。見苦しい」

水が漏れ出る。

ビット 「ああ、見ないで、コレット。自分でできますから。どうか見ないでください」

口を結ぶコレット。エミルを見る。鳴くオウム。

エミル 「全部茶番なんだよ。こんな鳥一羽大事にしたつて、一年以内にみんな鳥に絞め殺されるんだ。来月かも、明日かもしれない。気づいてるだろ？ アノードみたいな違法の商売人は、船に乗せてもらえない。僕らは地球から逃げられないんだ。取り残されて死ぬ運命なんだよ」

コレット 「そんなことない。金があれば——」

エミル 「金をどうやってつくる？ うちの在庫はもう、

気味の悪い鉢植えと、この騒がしい——」

コレット 「在庫はまだあるのよ！」

アノード 「在庫はまだある」

オウムの悲鳴。二人、見る。絶句。家の外壁から人の腕が、

飛び出ている。アノードの腕。オウムの首を締め上げる肉厚の手。壁の向こうから声。

アノード 「こんなところに穴が空いていたんだな。知ってたか？ コレット、」

暴れるオウムをひっ掴んだまま引っ込む腕。懸命に声を張るオウム。完全に引き摺りこまれる。

アノード 「この部屋にはな、エミル、お前は知らないだろうが」

穴の向こうから、羽をばたつかせる音。鳥類の絶叫。

アノード 「とっておきが眠ってるんだ」

静寂。目を見開いて硬直する二人。ギョロリ。穴から顔がのぞく。アノードの眼球。

アノード 「鳥も満足に世話できないんだな、お前たちはエミル 「……ビットが。ビットが不調だったんだ」

アノード、にっこり微笑む。

アノード 「心配いららないよ、エミル。俺は取り残されたりしない」

7 回想 アノードの家

アノード 「この部屋は、お前に関係のない部屋だ。一生関係のない部屋だ」

鍵のかけられた扉。

目の前でなすすべなく立ちつくす幼いコレット。

駆けるコレット。庭に出る。外壁に空いた、小さな穴。中を覗きこむ。箱の並び立つ小部屋。アノードが、女の子を抱擁している。

アノード 「ベアトリスのために作ったんだ。食べてごらん」

スプーンを女の子の口に運ぶアノードの手。

コレット、呟く。

コレット 「ベアトリス？」

8 夕方アノードの家（鉢植えの部屋）

床に並ぶ工具。ビットの脇に座るコレット。破損部を周到に修繕する。

コレット 「穴は塞いだわ。基盤も洗浄してみた」

ビット 「ありがとう。これで私もまともでしょうか」

微笑む コレット。

コレット 「まともは諦めて。経年劣化でレジスタがいかれてたから。時間の感覚が無いのね」

ビット 「レジスタを取り替えては？」

コレット 「そうしたらあなたがあなたじゃなくなる」

ビット 「……私は最低です。私は私のために、優しい

コレットの秘密を明かしてしまうところでした」

コレット 「もういいの——全部ばれてたみたい」

ビット 「アノードは穴に気づいていたのですか」

コレット 「覗き見にもね」

ビット 「私は一生懸命隠していました」

コレット 「怒ってないわ。穴も相当拡がってたのよ」

ビット 「私は仕事を失いました」

コレット 「……」

ビット 「だから、今日からあなたのお手伝いをやりませう」

コレット 「何をしてくれるの？」

ビット 「いつでも話し相手になります。いつでも駆け

つけます。あなたの助けになります」

コレット 「素敵ね。何か話してみてよ」

ビット 「あなたは今、部屋の女の子のことを考えています」

コレット 「……」

ビット 「ベアトリスと言いましたね」

コレット 「話題を変えて」

ビット 「コレットはベアトリスが羨ましいのですか」

コレット 「ビット」

ビット 「コレットはベアトリスが羨ましいのです」

コレット 「基盤を抜くわよ」

9 夕方 蔦に覆われた街

赤い空。街の中心部に異様なオブジェクト。高い柱。土色の柱がそびえる。樹木のような表皮。表皮には細かい無数の孔穴。そこからツルがとび出る。成長の早送りのように、柱を中心として、蔦がぐんぐん伸びる。

10 夕方アノードの家（廊下）

うづくまる Emil。

プルルルル。電話が鳴る。

顔をあげる Emil。鍵のかかった扉に向かって呼びかける。

Emil 「アノード、電話」

反応無し。プルルルル。固まる Emil。数回の着信音。

Emil、手を伸ばす。プルルルル。受話器を取る。

男 『〈灯籠〉が立った！ アノード早く来い！』

息が止まる。

男 『今すぐだ。××通りに車を用意してる。ちゃんともう一人分の席を開けてるぜ』

唾を飲む。もう一人分？

男 『確認だが、土産の方は大丈夫だろうな？ お

い聞いているのか？ —— お前、誰だ？』

解錠の音。扉が開く。アノードが出てくる。飛び上がる Emil。目が合う二人。沈黙。アノード、大股で迫る。Emil の首根っこを掴む。張り飛ばし、受話器をひったくる。

アノード 「俺だ。代わった。なんでもない。もう一度話

せ—— 灯籠が？ まずいな」

Emil 「誰？」

アノード 「（Emilに）黙れ。—— ああ。ああ。すぐ出る」

鉢植えの部屋から顔を出すコレット。目を見張る。

開いた扉。あの小部屋の扉が開いたままになっている。

吸い寄せられるように歩くコレット。鼓動。Emilと目が

合う。見つめあう。アノードの話し声。コレット、小部屋に

入る。

アノード 「土産か？へセンネットカゲ」だ。馬鹿。他の

雑魚とは違う—— 動物が千年もつんだぞ。だ

れが文句ある？」

電話に夢中のアノード。Emilもコレットの方へ行く。

11 夕方アノードの家（箱の小部屋）

たくさんの箱。箱の一つ一つが、中は液体で満たされ、そこに生き物が一体ずつ入っている。死んだように眠っている。眠るオオカミ。眠るヘビクイワシ。眠るカマイルカ。眠るオオトカゲ。眠る人間。

人間。五歳ほどの女の子。人形のような洋服。青白い肌。凝視するコレット。遅れて入る Emil。呆気にとられる。

Emil 「——人間？」

コレット 「へアトリス」よ」

部屋を見渡すエミル。箱をまじまじと見る。

エミル 「凍眠機だ。この動物たちが在庫か——この子も」

コレット 「アノードはたまにこの子を出してたの。それで——」

エミル 「コレット」

コレット 「それで——エミル、私の思ってることを聞いて」

エミル 「同じことを思ってる」

エミルを向くコレット。

コレット 「私たち捨てられるんだわ。多分——今から」

庭。地を滑り、迫る葛。廊下。受話器を握るアノード。小部屋。

向かい合うコレットとエミル。部屋の隅に空いた穴。外から這い寄る葛が見える。葉が擦れ、街全体が息をするように動いて見える。

12 夕方アノードの家（箱の小部屋）

電話を切る音。

コレット 「どうしよう。どうしようどうしよう」

迫る足音。

エミル、反射的に扉を閉める。鍵を閉める。鍵を閉める。ドアノブに手をかけるアノード。ガチャガチャ。開かない。

扉の向こうで大笑いする。

アノード 「コレット！ 何やってる！ ハハハ」

コレット 「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ。

アノード 「扉が外開きで悪かったな！ 今すぐバリケードを作った方がいい」

箱を動かす二人。バリケードを作る。ポケットから鍵を取り出すアノード。

アノード

「その部屋に入るのは初めてだろ！ お前ら、姉さんに挨拶はしたか？ よく似てるだろう」

腹を抱えて笑うアノード。鍵を揺らす。泣きながら箱を押す二人。

コレット 「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

アノード 「バリケードはできたか？ そろそろ開けるぞ！」

アノード、鍵を差し込む。解錠の音。開く扉。大男の影。

アノード 「全然だめじゃないか」

アノード

「全然だめじゃないか」

アノード

アノード、積まれた箱を容易く押し退け、入ってくる。

13 夕方アノードの家（箱の小部屋）

箱の側面にあるパネルを操作するアノード。機械音。箱の蓋が開く。蒸気。染み出す液体。箱から一匹のオトカゲが飛び出る。不自然にうごめく。アノード、トカゲの尻尾を掴んで持ち上げ、鞆に押し込む。立ち尽くすコレットとエミル。アノード 「雄と雌一匹ずつ。つがいで売るんだ」

アノード、もう一つの箱を同じように開ける。違った色のオトカゲ。鞆に詰める。暴れる鞆。気にも留めないアノード。アノード 「出かけてくる」

アノード、ベアトリスの入った箱を触る。

アノード 「この子と一緒に」

コレット 「……いつ戻ってくるの？」

アノード 「戻らない」

コレット、震えだす。全身に冷や汗。エミル、コレットを見る。拳を握りしめ、一歩進む。アノードと箱の間に割り込む。エミル 「狂ってる。こんな小さな子を売りさばくのか」
アノード 「大丈夫だ」

エミル 「え？」

アノード 「大丈夫、この子は売らない。だからどけ」

固まるエミル。

アノード 「何なんだ？ この子は俺の娘だぞ。売るわけがない。そりゃこの子は売れる。途方もない額がつく。お前や、コレットとは違う。俺が作った豚よりも質が悪いお前らとは違う。百万倍、じゃきかない。でもな、この子は絶対に売らない。俺の娘だからだ。俺の娘でこの子は俺の俺だけのものだから、俺はこの子を売らない。連れていくだけなんだ。わかったか？ だから大丈夫だ。手を離せおい」

エミル 「違う！」

エミルを押し退けようとするアノード。振れる鞆。エミル、掴んで離さない。紅潮した顔。涙の止まらないコレット。

エミル 「違うよ！ 意味がわからないよ！ だって、だってだってコレットだって、僕だって——

父さんの子じゃないか！」

その時部屋中に振動が走る。

眉をひそめるアノード。

エミル 「置いていかないですよ！ 父さん！」

アノード 「お前は自分が何をやってるのかわかっているのか？ ここで俺の邪魔をしてどうなる？

この子を残して地球に残してこの子は

どうなる？ 何を——」

凍りつくアノード。部屋を見回す。

いつのまにか部屋中に鳶が侵入している。

アノード 「まづい」

鳶が動く。蛇のように床を、壁を、天井を這う。目に追えない速度。みるみるうちに部屋を覆いつくす。体に絡みつくツル。振り払う。

扉が軋む音。鳶が部屋になだれ込む。三人を襲う。悲鳴。割れる電灯。外壁の穴から入り込むツルの奔流。壁に走る亀裂。転倒するアノード。コレットに駆け寄るエミル。鳶がアノードの下半身を覆う。包み込む。もがく。轟音。壁が崩れだす。露出する部屋。差し込む夕日。

遠景に立つ巨大な柱が見える。土色の柱。目が眩む。柱の先端が、灯台の明かりのように灯っていた。街を照らす。

アノード 「灯籠だ……！」

引きずられるアノード。吹き出す血。呻き声。血走った眼球。ベアトリスを凝視する。震えあがるコレット。

コレット 「アノード！」

エミル 「コレット！ ここに！」

オオトカゲの入っていた二つの空き箱。コレットを押し込むエミル。抵抗するコレット。押し寄せる鳶の波。

エミル 「絞め殺されるぞ！」

コレット 「アノードが死んじやう！」

エミル、無理やり押し込み蓋を閉める。自分ももう一つの箱に入る。透明な蓋ごしに目を合わせる二人。目線を阻む鳶。目を閉じて眠っているベアトリス。蓋の向こうで、血を吐くアノード。眼光。

アノード 「ベアトリス——」

アノードの姿が見えなくなる。顔を覆うコレット。

蓋に固いもののぶつかる音がする。顔を上げる。ツルの隙間にビットの姿。目の前にビットがいる。

コレット 「ビット！」

ビット 「コレット、可哀想に」

コレット 「今開けるわ！」

蓋を叩くコレット。開かない。叩く。

ビット 「コレットはコレットは可哀想です。コレット

はベアトリスじゃない」

コレット 「開かない！ 開かないの！」

ビット 「でも大丈夫ですコレット、安心して。私はこ

この使い方がわかります。共犯ですから」
コレット 「え？」

ビット、箱の側面を操作する。起動音。血の気が引くコレット。
ト。

コレット 「何をするの」

ビット 「これで一緒です。あなたは、アトリスと一緒になります。安心して。安心してね」

コレット 「ビット、待って！」

叩く。無視するビット。器用にボタンを押下する。箱内に冷気が広がる。底から液体が注がれる。コレット、悲鳴。

ビット 「コレット。私に仕事を与えてくれてありがとう」

コレット 「違うわ、ビット！」

ビット 「コレットは優しい」

コレット 「お願い！ やめて！」

首元まで満ちる液。水位が上がり続ける。やがて顔まで浸かる。息を吐く。もがく。びくともしない蓋。まぶたが落ちてくる。遠のく意識。

Debris

コレット、眠りに落ちる。

街。灯籠を中心に緑色の波紋が街を覆う。

ブラック。

第二部

14 宇宙

無音の宇宙空間。

燃える太陽。纏わりつく熱気。

照らされる惑星。地球。

太陽からの放射。星に昼夜を象る。

地球の夜。真っ黒。近づく。

無数の点滅。極小のきらめき。星空に似ている。地表面に満ちる光。

15 夜地球

屹立する柱——灯籠。木々のように並ぶ。大小さまざま。

鉄塔のように高くそびえる灯籠。土筆大に細かに群れる灯籠。

水底で川の流れる向きに傾斜する灯籠。それぞれの表皮から

伸びるツル。絡まり、茂り、地上を包む。第一部とは比べよ

うのない密度。蔦の茂りが音を吸収するため何も反響しない。

16 早朝 灯籠の森

ギチギチギチギチ。光る灯籠。うねる蔦。蔦に吊られ、宙に浮かぶ三つの箱。締め付けられる。ギチギチギチギチ。形が歪む。ギチギチギチ……ひしゃげる箱。金属音。蓋が外れる。落下する。投げ出される三人の人間。

目を開けるコレット。びしょ濡れ。歯がガタガタと鳴る。隣で目をさますエミル。咳き込む。目が合う二人。抱きしめ合う。震える。

コレット 「アノードが、アノードが——！」

エミル 「ビットは何故あんなことを？」

コレット 「私のせいなの」

バキバキバキ。頭上で潰される箱。鉄くずが降る。灯籠の光が消える。

コレット 「私たち、どれくらい眠っていたの？」

エミル 「——似てる」

指差すエミル。コレット、振り向く。ベアトリスが立っている。五歳くらいの子の見た目。結んだ口。小さな足で直立。こちらをまっすぐに見る。驚くほど二人に似た目鼻立ち。瞳の色だけは二人とは違う深緑色。

コレット 「私とエミルの——姉さんよ」

沈黙。

コレット 「おいで」

動かない。

コレット 「私、私はコレット。こっちはエミル。あなたの家族よ」

動かない。コレット、歩み寄る。動かない。手を取るコレット。抵抗しない。目が合う。

コレット 「一緒に行こう。ベベ」

エミル 「ベベ？」

コレット 「この子の名前」

エミル 「——ベベ」

エミル、反対の手を取る。手を繋いだ三人。ベベ、まっすぐに前を見る。三人、その向きへ歩き出す。

17 昼並び立つ灯籠

密林。溢れかえる蔦。地面が見えない。足を置く。柔らかい感触。恐る恐る歩く。雑草や樹木など、他の植物も見られる。が、どれも変容して凶鑑通りの見た目をしていない。

エミル 「(蔦を見て)信じられない量だ。相当時間が経つ

てる」

コレット 「今は動いてないみたい」

エミル 「灯籠が活性化してないんだ」

コレット 「——灯籠って何なの？」

一本の灯籠を見上げる。

エミル 「この木みたいなやつだよ。蔦の親玉」

コレット 「活性化の条件は？」

エミル 「刺激だ。ツルが引つ張られると起きる」

コレット 「そして絞め殺されるのね」

エミル 「だから話は簡単だ。刺激さえしなければいい。

——本たりともね」

見渡す二人。視界の果てまで続く灯籠の森。コレット、乾いた笑み。この中の一本たりとも刺激しなければいい。

コレット 「とりあえず、人を探そう」

歩く。慎重に。

刻々と動く太陽。

踏みしめる足。

訪れる夜。

18 夜 オークの根元

仄かな月明かり。オークの大樹。蔦に取り憑かれ、葉に覆われた太い幹。見上げる。広がる枝葉。ところどころから飛び出るツル。違和感。オーク自身から蔦が発生している？

べべの睫毛。音もなく眠る。コレット、見つめる。

エミル 「何もない」

コレット 「……」

エミル 「人も、街も。知ってる景色がひとつも！」

コレット 「(静かに、と合図) 起きるわ」

エミル、震えるため息。

エミル 「全部埋もれたんだ。僕たちが寝てる間に」

コレット 「まだわからないわ。明日も歩こう」

エミル 「もう歩きたくないよ。足を滑らせてもしたら

——首が飛んでるかもしれないんだぞ」

コレット 「……」

エミル 「もう地球に人はいないんだ。みんな船に乗っ

て逃げて、他は全員——」

コレット 「見て」

目の前に小さな昆虫。見覚えのない種。尻から、尻尾のようにツルが垂れている。ふらふらと揺曳。前方の樹に止まる。

登る。動く六本足。やがて昆虫がたどり着いたのは一つの果実。

コレット、立ちあがる。虫、飛び去る。果実。柑橘類に似ている。もぎ取る。表面にへばりつくツルを剥がす。エミル、目を細める。

エミル 「毒があるかも」

コレット 「わからない」

沈黙。

エミル 「どうする」

コレット 「どうしたい？」

沈黙。

エミル 「一緒に食べたい。家族がするみたいに」

半分に剥いた実。同時にかぶりつく二人。目を合わせる。

小さく笑う。もそもぞ動くべべ。コレット。実をちぎる。べべの口元に差し出す。口に入れるべべ。動く唇。喉を鳴らし、

何かを言う。

べべ 「どこ？」

コレット 「べべ？」

再び眠るべべ。

月。

身を寄せる三人。

コレットとエミルも目を閉じる。

19 早朝果実の下

エミル 「計画を聞いて」

コレット 「うん」

エミル 「まず歩く。ずっと歩く。そして人を見つめる。

何とかして、船に乗せてもらおう。船に乗って

この星を出る。それでそこで仕事を見つめる

んだ。仕事をして金を稼いで、僕たちで生活

をするんだ。どうかね？」

コレット 「完璧ね」

ベベ、また舌足らずに声を発する。

三人、また手を繋ぐ。ゆっくり歩き出す。

途方もなく続く灯籠の森。

数日が経つ。

20 夕方岩石のとりで

組み重なる巨巖。血管のように表面を這うツル。くぼみに足をかけるベベ。足を滑らす。ううう、と呻く。しゃがむ。じつと動かない。声をかけるコレット。返事はない。

コレット 「休もう」

岩の一つに腰をかける。

風が吹く。葉が騒ぐ。

コレット 「ベベは文句を言わないわね」

エミル 「文句どころか、何もだよ」

コレット 「言葉がわからないのかしら？」

ベベの声。また何か言う。

コレット 「ベベ、なんて言ったの？」

返事なし。俯いている。

コレット 「ベベ？」

近寄るコレット。ベベを見る。顔が涙で濡れている。唸る

ような声。口を動かす。

コレット 「ベベ、なんて言ってるの？」

ベベ 「ばばどい」

絶句するコレット。唇を噛む。ばば、ばばあと連呼するベベ。やがて泣き出す。赤子のように泣く。

コレット 「ベベ——あなたのパパは」

エミル 「コレット！」

コレット、振り向く。眉をひそめるエミル。遠くを見ている。視線の先に点滅。光の群れ。耳に届く摩擦音。

コレット 「人？」

エミル 「灯籠だ。蔦が引つ張りあって——連鎖してる」

光の群れが、動く。鈍い動き。視界の右端から左端へ。摩擦音を伴い動く。次第に加速する。左右に振れる。動き回らだんだん大きくなってくる。音も大きくなってくる。近づいてくる。

ベベの泣き声。

エミル 「こつちに来てる！」

ベベを抱き寄せるコレット。駆け寄るエミル。岩の隙間に逃げ込む三人。

周囲の灯籠が光る。

叫びのような騒音。エミルとコレット、ベベを挟んでうずくまる。死に物狂い。うねるツル。蔦の洪水。目の眩むフラッシュ。大音量。縮こまる三人。空中を走る無数の直線。岩を締め上げる蔦。ひびが走る。飛び散る土埃。高速で巡る葉。日の光を凌駕する発光。

岩が砕ける。露出した三人。飛び交うツル。エミルとコレット

トの肌を激しく叩く。エミルの腕に絡まる。豪速で絞めあげ。軋む関節。泣き叫ぶエミル。跳ね飛ばされる上体。悲鳴。勢いで運良くツルが解ける。ベベを覆って伏せるコレット。目をきつく瞑る。盲滅法にちぎれる髪の毛。

ベベ 「はば！ どここ！」

轟音。

轟音。

21 夕方 砕けた岩場

やがて通り過ぎる蔦の嵐。

遠ざかる光と音。

静寂を取り戻す周囲。

エミルの絶叫。顔中の擦り傷。腕にくつきり残る痕。

エミル 「いやだ！ いやだ！ やめたい！ 全部やめたいよ！ ここはどこだよ！ ああああ！」

コレット 「生きてるわ！ まだ生きてる」

息を切らすコレット。土まみれ。

エミル 「ふざけてる！ いくら気をつけたって、向こうから勝手に来るんじゃないか！ もう嫌だ

よコレット。僕、やめたい。こんなの、生き
てるって言わない」

コレット 「だめ、エミル」

震えるべへ。顔を埋め、丸くなっている。ぶるぶるぶるぶ
る、震える。見下ろすエミル。

エミル 「なんで僕らがこんな痛い思いをしなきゃいけ
ないんだ！ 僕らが痛い思いをして、どうし
てこいつは無事なんだ!？」

コレット 「べべは小さいのよ」

エミル 「小さいからなんだ！ 僕はこの三つの三倍の人
生——ずつと痛かつたんだぞ！」

コレット 「やめて」

沈黙。

コレット 「私だつてわからないよ。いきなり親みたいな
ことをさせられて、やり方がわからない。教
わつてこなかったもの！ でも、この子は守
らなきゃいけないの」

土をはらうコレット。

コレット 「十六年間パパなんて一言も呼んだことなかつ
た。ずっと想像してたわ、アノードがこの子
を抱きしめるのを見てずつと、私がこの子だつ

たらつて、アノードが触るのが私の髪だつ
たらつて！ でももう、そういう歳じゃない
の。私たちはアノードの代わりをやらなきゃ
いけないの。アノードみたいにこの子を愛さ
なきゃいけないの。ふりでも愛さなきゃいけ
ないの！ そうしないと、私たちが、もう本
当に——だめになる。言つてることわかる？
だめになるのよ」

22 夜 光る草むら

草むら。一帯に生える小さな灯籠。べべの背ほど。それぞ
れから伸びる細いツル。灯つては消える灯籠たち。夢うつつ
のよう。まばらに夜を照らす。汚れきつた身体。力なく歩く
エミル。死んだ眼。後方で手を繋ぎ歩くコレットとべべ。
立ち止まるエミル。

目の前に何かがある。

灯籠の明かり。目を凝らす。

一台のバス。

バスが地面に縦に突き刺さっている。車体の前半部だけ地

上に飛び出ている。錆び。色を失った外装。存在しないタイヤ。跡形もない窓ガラス。車体を貫通した何本もの葛。

エミル 「バス——？」

ゆっくり近寄るエミル。低い窓から内部を覗く。

車内。汚い座席。破れ腐食した布地。

外から見えているコレットとベベ。コレット、足元に何かを見つける。屈む。

葛が結ばれている。

二本のツルが、二重螺旋状に糾われ、別のツルに繋がり、Y字をつくっている。結び目は細いツルの紐できつく固められている。触れてみるコレット。頑丈な結び目。

エミル 「ここなら眠れる」

エミルの声。コレット、顔を上げる。

バスに入る三人。

手近の背もたれに横になるエミル。

エミル 「上の席で寝たらいい。安全だ」

コレット 「わかった」

ベベを抱き、座席をよじ登るコレット。力をこめて持ち上げる。一段一段息をつく。ようやく最上段に登る。背もたれに身を預ける二人。

三人、死んだように眠る。

小さな灯籠たち。光る草むら。巡る時間。

色づきだす地平線。朝の気配。

目を覚ますコレット。漫然と顔を傾ける。横で眠るべべ。視線を滑らす。通路を挟んだ隣に運転席。凝視する。

コレット 「エミル」

白む空。目をこするエミル。

コレット 「エミル」

エミル 「何……」

コレット 「隣に人がいる」

エミル 「……」

コレット 「運転席に誰かいるの」

エミル、飛び起きる。

23 早朝バスの亡骸

エミル 「死んでるんだよ。多分」

よじ登って覗くエミル。宇宙服に身を包んだ巨体。寸胴な体軀。ピクリとも動かず、天を向いたまま運転席の背もたれ

に寝ている。土にまみれた服の布地。黄ばみきつている。コレット、宇宙服に付着した葉を除ける。

地平線に顔を出す太陽。窓枠から射し込む朝日。漆黒のヘルメットを照らす。不透明。顔が見えない。じつと見つめるべ。

コレット 「ここを見て」

宇宙服の左腕に刺繍。

〈Rescue Plan 20XX N Babbage〉

エミル 「20XX——来年だ」

コレット 「今が、来年なのかも。エミル、私——」

エミル 「ぬか喜びになる」

コレット 「わかっている。わかっているわ」

エミル 「こいつは死んでるんだ」

宇宙服が跳ね起きる。

コレットとエミル、驚き声をあげる。

ギシギシ揺れる背もたれ。三人を見下ろす黒いヘルメット。べべ、おぼつかかなげな声を出す。

宇宙服 「あー……」

中年男性の声。

宇宙服 「寝坊かな？」

24 早朝 軋む背もたれ

宇宙服の肩に乗ったべべ。不思議そうにあたりを見渡す。落ちないようヘルメットをしつかり掴んだ両手。

宇宙服 「人類は急ぎすぎたんだ」

対岸の席に座り、話を聞くコレットとエミル。目は警戒の色。べべの足を抱え、二人を見据えるヘルメット。表情はわからない。

宇宙服 「三ヶ月前に最終便が出て、それ以降は切り捨てさ。あまりに多くの人が取り残された」

耳打ちするコレットとエミル。

コレット 「最終便が三ヶ月前——やっぱり来年よ」

エミル 「——一年近く眠ってたのか」

体を伸ばすべべ。ちょうど頭が車体を飛び出す。バスの前面が見える。ほとんど消えかけた塗装。うっすらと子供のイラストがプリントされている。スクールバス？

エミル 「〈救助計画〉って？」

宇宙服 「NGOの組織だ。ざっくり言うとう——」

ベベが落ちないようバランスをとる宇宙服。

宇宙服 「君たちみたいな、地球に残された人を取り戻しにやってきたレスキュー隊。俺もその一員。」

(ベベに) 掴まっててね……」

肩にベベを乗せたまま、ゆるやかな動きで座席を降りていく。地面にゆっくりとベベを下ろす。コレットとエミル、最上段から見下ろす。

宇宙服 「俺は幸運だ。居眠りしてる間に、救助対象の方から来てくれるとはね！」

「他にいるかい？」

コレット 「救助対象って——私たちのこと？」

宇宙服 「他にいるかい？」

少し登り、こちらに手を伸ばす宇宙服。コレット、唾を飲む。大きな手をまじまじと見つめる。

宇宙服 「ここから三日、歩いたところに隊の船がある。そこまでの辛抱だ。歩けるね？」

ヘルメットはまつすぐコレットを向いている。ためらいながら手を伸ばすコレット。一緒にバスを降りる。無言でついていくエミル。疑念を孕んだ目。

バスを出た一行。宇宙服、歩き出そうとする。躊躇している三人。ベベと手を繋いだコレット。宇宙服、こちらを見る。

宇宙服 「急いだほうがいい」

コレット 「その——」

葉がさわさわ鳴る。

コレット 「私たち——助かるの？」

こともなげに答える宇宙服。

宇宙服 「それが俺の仕事だ」

鼓動。

コレットの表情が緩む。ベベの手を強く握る。

一步、踏み出すコレット。

エミル、服をつかんで止める。振り向くコレット。

エミル 「コレット、目を逸らしちゃダメだ」

コレット 「……」

エミル 「訊くんだ。始まる前に。わからないことを放置しちゃ駄目だ。コレット、あいつには明らかに

かにおかしいところがあるだろ」

鼓動。

コレット、小さく頷く。向き直る。宇宙服に尋ねる。

コレット 「なんで——なんで地上で宇宙服を着てるの？」

宇宙服 「規則なんだ」

ベベと繋いだ手が汗ばむ。

コレット 「答えになってないわ」

宇宙服 「……なんでだと思おう？」

エミルが答える。

エミル 「地上で宇宙服を着たら、それは宇宙服じゃな

くて防護服だ。——僕らや、外気との接触を避けてる」

宇宙服 「鋭いな——娘を思い出す」

笑い声。かがむ宇宙服。何かをつまんで拾い上げる。

宇宙服 「隠してたわけじゃないんだ。君たちは知らない

んだね。見てごらん」

三人の前に掲げる。小さな昆虫。二枚の羽根の隙間から、無数のツルが毛のように飛び出ている。

宇宙服 「この忌まわしい雑草が覇権を握った理由だよ。

葛は生殖をしない。起こっていることは至極単純なんだ。葛でなかつたものが葛になるから、数が増える」

昆虫、羽根を広げる。

内側にもびっしりと細かいツルがこびりついている。

宇宙服 「この星にいる生き物は、だんだん葛になって

いく」

飛ぼうとした昆虫。ぼとつ。ツルの重みで地面に落下する。

宇宙服 「このままだと、やがて君たちも葛になるんだ」

25 早朝 光らない草むら

寝静まった灯籠。

固まった三人。淡々と続ける宇宙服。

宇宙服 「葛はもはや生物として見ない。現象なんだ。

今の地球に長居した生物は、やがて身体から葛が生えてくる。しまいには葛そのものになる。それが葛の定義」

エミル、声を荒げる。

エミル 「要因は——放射線？ ウイルスか？」

宇宙服 「わからない。この防護スーツだって完璧とは

限らない」

エミル 「治療法は!? 長居ってどれくらい長居だ」

「いいかい？ 科学には流行り廃りがある。国の目から見たらね。あの葛は一体なんだったのか、どうすれば防げたのか——そんな考古学はみんな、星を出た時点で、目下興味を失くしたんだ。科学者は今、星図を読むので忙しい」

コレット 「葛が生えたら——もう救助対象じゃないの

ね？」

少しの間。

宇宙服 「人類は潔癖を選んだ」

コレット 「私たちはどれくらい——大丈夫なの？」

宇宙服 「船に着いたら、検査を受けてもらおう。そこで

すべてわかる。この救助計画はね、最後にそういう賭けが、勝率もわからない賭けが待ってるんだ」

表情を歪ませるエミル。しゃがみこむ。手で顔を覆う。絶望の息を吐く。

宇宙服 「君たちの境遇を思うと言葉も出ない。ただね、

ただ、本当に急ぐべきなんだ」

風が強く吹く。

ベベ、曖昧に口を開いている。

打ちひしがれているエミル。

コレット、ベベの手を握りしめ、遙か先を見据える。

コレット 「エミル」

見上げるエミル。

コレット 「立って」

コレットの瞳。

沈黙。

エミル、目を瞑り、開く。腰を上げる。ベベのもう一つの

手をとる。三人、一緒に宇宙服の方へ行く。

宇宙服 「俺はノーベンバー。ノーベンバー・バベッジだ」

コレット 「コレット。(エミルを指し) エミルよ」

エミル 「こつちはベベ」

ベベ 「ベベ」

ノーベンバー「コレット、エミル、ベベ。三日だ。三日だけ、歩き続けるんだ。きつと大丈夫。君たちはきつと大丈夫だからね」

ノーベンバー、三人の肩に手を置く。陽光に艶めくヘルメット。漆黒に反射したコレット、エミル、ベベの姿。ベベの瞳に映るのはノーベンバーの大きな身体。

26 一日目 昼 割れた地面

ノーベンバー「機械いじりが好きなんだ」

張り巡らされた蔦。蔦を彩る木漏れ日。踏みしめる大きな足。ノーベンバーの肩の上にはベベ。そのあとを懸命についでいくコレットとエミル。

ノーベンバー「子供の頃、話し相手がいなくてね、友達を自作したことがある。親父の車をさ、ばらして

組み立てたんだ。タイヤ一個で動く。聞き上手だけど、マフラーから尻をこくのが短所だったな。あれは確かべべくらいの——」

滔々と話し続けるノーベンバー。ざくざくと進む。ヘルメットをぎゅつと掴むべべ。空を見ている。後方の二人、小声で話す。

コレット 「おしゃべりね」

エミル 「襲えると思う？」

コレット 「え？」

エミル 「もしもだ」

コレット 「……」

エミル 「必要な想定だよ。まさか検査をパスできなかったら、大人しく地上で船を見送るつもり？」

コレット 「……相手は大人よ」

コレット、エミルの細い腕を触る。煩わしげに振り払うエミル。

振り向くノーベンバー。二人を待つ。

ノーベンバー「君たちは何が好きかな？」

沈黙。コレット、吃り気味に言う。

コレット 「わからない。エミルは本が好きよ」

エミル 「好きじゃない」

ノーベンバー「俺も本は好きだ。ディックは読む？」

無視するエミル。ノーベンバーを追い越し歩く。

エミル 「こっちで本当にあつてるのか？」

ノーベンバー「ああ、一带の地図は頭に入ってる——」

その瞬間。エミルの足が藁の間に嵌まる。吸い込まれるように落下する。コレット、悲鳴。ノーベンバー、即座に動く。落ちるエミルの脇をがしつと抱える。灯籠は反応しない。真っ青のエミル。

コレット 「大丈夫!？」

エミル 「この下、底無しだ!」

藁の間から見える空間。暗闇が広がる。土塊の落ちる音が反響する。

ノーベンバー「藁でできた橋にいるわけか。こんな大規模な

地割れ、事前情報にはなかった」

エミル 「頼りになる地図だな!」

ノーベンバー「ハハ、面目ない。よいしょ」

ノーベンバー、エミルを軽々持ち上げる。持ち上げられ、べべと目が合うエミル。面白そうに笑うべべ。

ノーベンバー「君が無事でよかった」

エミル 「おろせ」

ノーベンバー「ディックは読む？」

エミル 「おろせよ。八つ裂きにするぞ」

コレット 「エミルは学問書を読むの」

エミル 「読まない」

ノーベンバー「話が合いそうだ」

27 一日目 夕方 葛の洞穴

ノーベンバー「よく歩いた。今日は休もう」

洞穴。木の根のように土の内外を這うツル。天井から、何本もの灯籠が氷柱のように垂れ下がる。腰掛けるエミルと比べ。疲弊しきった身体。瞼の重み。

洞穴のすぐ外。

夕日を望むコレット。乱れた髪を手で整える。隣にノーベンバー。

ノーベンバー「どんな気分かな？」

コレット 「わからない」

ノーベンバー「怖くない？」

コレット 「怖くはないわ」

ノーベンバー「君は勇敢だね」

沈黙。

ノーベンバー「俺は怖いんだけど。葛とか。めっちゃくちゃ」

コレット、顔を緩ませる。

コレット 「怖くないわ」

ノーベンバー「何かコツでも？」

コレット 「(首を振る)ただ慣れてるだけ。怯え慣れてるの」

ノーベンバー「……」

コレット 「いつ殺されるかわからないとか、そういうのは」

コレット、小さく笑う。

じつと動かない黒いヘルメット。

気を取り直したように話します。

ノーベンバー「楽しい話をしよう。えっとそうだ、俺の娘の話。

シエラって言うんだけど、誰に似たのか話好

きで——」

コレット 「ノーベンバー」

ノーベンバー「ベベと同じ年くらいなんだけど、すごく賢いんだ。この前二次方程式の判別式を教えたんだぜ」

コレット 「ノーベンバー、もう寝てもいい？」

ノーベンバー「だめだ」

28 一日目 夜 洞穴の奥

洞穴の中。氷柱のように垂れるツル。ベベの顔に格子状の影を落とす。灯籠の一つから伸びた蔦が、何かを吊り下げている。見上げるエミル。腐食した傘の骨組み。無残に折れ曲がっている。

エミル 「ベベわかる？ 傘だよ。使えないけど」

無言で首をかしげるベベ。

エミル 「たぶん、蔦がはずみで掘り出したんだ」

ベベ 「……」

エミル 「謝るよ」

ベベ 「……」

エミル 「昨日は、ひどいことを言ったと思う」

土を弄くるベベ。エミル、無言で見守る。

沈黙。

エミル 「ベベは何が好き？」

ぼそっと「ばばどこ」と言う。エミル、目線を落とす。

エミル 「——お前はアノードが大好きなんだな。いいことを教えてあげる」

ベベの顔にかかった影が揺れる。丸い大きな目。

エミル 「アノードもね、お前のことが大好きだったんだ」

両手いっぱい摘んだ蔦の葉を抱えたノーベンバー。地面に敷き詰める。形を整える。大きな手で細かい作業。みずばらしい葉のベッド。

横で寝ている三人。

ノーベンバー、ひとりひとりを抱えて、ベッドに移す。気づいて薄目を開けるコレット。

コレット 「何してるの？」

ノーベンバー「寝てて」

コレット、目を閉じる。

コレット 「今なら話していいわよ」

ノーベンバー「え？」

コレット 「シエラのこと」

ノーベンバー「ほんと？」

コレット 「寝るまでね」

どかかと腰を下ろすノーベンバー。足を組んで身体を揺らす。

ノーベンバー「シエラはえーっと——いい子なんだ。そう、

すごくいい子だ」

コレット 「知ってる」

ノーベンバー「うん、シエラはいい子なんだけど、それで、だから、俺は嫌われてた」

コレット 「……」

ノーベンバー「俺は駄目な大人なんだ。駄目って色々あると思うけどさ、俺はこう、なんだろう。よくないものをばらまくんだよ。俺は人に迷惑をかけるようにできてるんだ。そういう駄目さがあるんだ、うまく言えないけど。だから、俺がいるとシエラは駄目になるんだ。俺もわかってたんだ、わかってたんだけど、シエラから離れられなかったんだ。それくらい駄目なおっさんなんだよ」

コレット 「……」

ノーベンバー「でもシエラは賢いんだ。賢いから、俺からちゃんと離れたんだ。そのほうが人生が潤滑に回ることを彼女は計算して理解したんだよ」

コレット 「……」

ノーベンバー「ねえ聞いている？」

コレットの身体を揺する。笑うコレット。

コレット 「聞いているって」

ノーベンバー「相槌を打ってよ」

もつと揺するノーベンバー。コレット、苛立ちげにその手を払いのける。エミルが目覚ます。不機嫌な唸り。

エミル 「頼むから黙ってくれ。寝ろ」

ノーベンバー「俺は平気だよ。あ、そうだ」

思い出したように脇のジッパーを開けるノーベンバー。アルミ製のブランケットを取り出す。ひどく黄ばんでいる。エミル、きつい目つき。

エミル 「知らない、そんなオンボロ」

ノーベンバー「そりゃ羽毛布団に比べたらね」

三人にそつとブランケットをのせる。表面を小さく撫でる。ノーベンバー「俺は君たちが気に入ったよ。よく眠れるといいね」

目を閉じたコレットとエミル。

夜の静寂。

ノーベンバーの穏やかな声が耳に届く。

ノーベンバー「コレット、エミル。俺は君たちのことをまだよく知らないけどね、でもこう思ってる。君たちは大丈夫。生き物は進化する。人間は進化するから。だからさ、親から産まれた君たちが、親より後の世代の君たちが、親より劣っているわけがないんだ。君たちの不安とか、

心配も、きつと全部大丈夫だからね」

目を閉じている、コレットとエミル。

29 二日目 朝 葛の氷柱

目を覚ますエミル。コレットとベベの寝顔を見る。

ノーベンバーの姿がない。

エミル、立ち上がる。洞穴の出口からあたりを見渡す。口をきつく結び、ノーベンバーの姿を探す。見つからない。

洞穴に戻る。二人の脇に座り込む。ベベが目を開けている。

目を合わせる二人。

ベベ 「のー」

エミル 「いなくなつた」

ベベ 「……」

エミル 「そんなもんだよ」

ベベ 「……」

エミル 「大人なんてそんなもんだ」

ベベの視線がエミルの後方に走っている。振り向く。

ノーベンバーがいる。

ノーベンバー「おはよう、二人とも」

エミル 「どこ行つてた」

涙目のエミル。

ノーベンバー「俺のレーションは、コレットが食いたくないっ

て言うからさ——」

差し出した手。一個の木の実。強く握りしめたせいで割れ

かけ、中身が飛び出ている。

ノーベンバー「フルーツアレルギーは？」

エミル、目をこする。笑うベベ。

昨夜吊られていた傘が失くなっている。気づかない一行。

30 二日目 昼 枝垂れ柳

曇りだした空。

変わらぬ風景。絡み合ったツル。風にそよぐ夥しい数の葉。

時折見られる蔦に近づいた生き物。

ノーベンバー「たとえば（指をクロスさせて）こう、互い違いの

回路を組むとね。真理値表に場合わけができ

る。フリップフロップはこんなふう——こ

の話面白い？」

コレット 「うん」

ノーベンバー「これを使えば、出力を意図的に遅延できるん

だ。遅延の何が嬉しいかというとうわつ」

何も無い空間を避けるように身をのけぞるノーベンバー。

上体を振られる肩の上のべべ。楽しそうにはしゃぐ。

エミル 「もう少し落ち着いて歩けないのか」

コレット 「エミル、足元！」

立ち止まるエミル。足元に蔦が張り出している。

それは、コレットが一昨日見たものと同様、二本のツルが

他の一本に、Y字に結ばれている。

エミル 「結ばれてる」

コレット 「これ、私も見たことある」

ノーベンバー「なんだって」

エミル 「明らかに人の手が加わってる——誰かいるん

だよ、近くに」

コレット 「助けを求めている？」

べべ 「うう」

べべの声。見上げる三人。

べべが上空から垂れ下がるツルを握っている。一行の背後

にそびえ立つ巨大な樹木。その枝という枝から、大量のツル

が吹き出て、枝垂れ柳のようになっていた。

ノーベンバー「これは——」

注視する一行。

大樹からツルが、放射状に飛び出ている。

張力を受け、ピンと張ったツルが、森のそこらじゅうへ伸

びている。森の天井を無数の直線が駆け巡っている。

ノーベンバー「助けを求めているにしては——やりすぎだな」

コレット 「どうするの」

ノーベンバー「調査するよ。君たちを送り届けた後でね」

コレット、硬い表情。

コレット 「明日船に着いたら、すぐに出るの？」

ノーベンバー「地球に残された時間は少ないからね」

そう言いコレットを見る。コレット、こくこくと頷く。

31 二日目 昼柳の木陰

分厚さを増す雲。

鬱蒼と広がる蔦の森。

引きずるような音。

人間の足。裸足がペタペタと蔦を踏む。

女性。二十歳に満たないほどの年齢。

服を身につけていない。代わりに身体中から生えたツルを

纏っている。腕や、脚や、胸元の皮膚を突き破って伸びたツル。動く揺れる葉。大量のツルを、重そうに、ずるずると引きずって歩く。

32 二日目夕方地球

白色が大陸を覆い隠す。

雲が渦を巻く。

大気が湿り気を帯びる。

33 二日目夕方枯葉の窪地

地面一帯に積もった蔦の枯葉。色を失い灰色になっている。べべの瞳に映る、黒ずんだ雲。瞬きをする。

ノーベンバー「べべは降ると思う?」

曖昧に返事をするべべ。

座り込み、木の実をかじるコレット。

コレット 「あなたは食べないの?」

ノーベンバー「必要がないんだ。このスーツを着てたらね」

コレット 「羨ましいわ」

ノーベンバー「首を振る」こんなもの人権を剥奪された気分だよ。健康な人間たるもの、美味しいものを食べて、そして彼のように――」

岩陰から戻ってくるエミル。コレット、苦笑い。

エミル 「何笑ってる」

コレット 「なんでもない」

エミル 「……。ノーベンバー、もう少し歩かないか」

ノーベンバー「今日は充分だ」

エミル 「早いに越したことはないだろ」

ノーベンバー「焦っても仕方ない」

エミル 「焦るなって? お前が焦るなっていうのか?」

エミル、語気を荒くする。

エミル 「そりゃあお前は快適なスーツを着込んで、内心穏やかだろうね。でも僕たちは、空気を吸うのもものを食うのも命がけなんだ。ここで悠長にしている時間がどれだけ僕らの首を絞めているのかもわからない。それなのに、お前は焦るなって?」

ノーベンバー「ごめん」

沈黙。

ノーベンバー「ごめん、でも、休もうよ、エミル」

コレット 「ベベも疲れてる」

苛立ち顔で腰を下ろすエミル。そっぽを向き、うずくまる。その背中を見つめるノーベンバー。困ったような声を出す。

ノーベンバー「ああ、エミル、ごめん」

コレット 「そっとしてあげて」

ノーベンバー「心配ないよ、エミル。船に着くまで、俺は君を守るからね」

コレット 「そういう問題じゃないのよ」

ノーベンバー「命にかえても君を守るよ」

コレット 「『命にかえても』なんて言わないで。言えば言うほど軽くなる」

気怠い大気をそのままに、やがて夜が降りる。

暗闇。

時が過ぎる。

ている。揺らめく光が屈折して目に届く。

ノーベンバー「身体を洗っていくといい」

頷くコレット。ベベの服を脱がせてやる。

エミル 「僕はいいい」

コレット 「駄目よ。化膿する」

ノーベンバー「まあまあ、年頃なんだし——」

コレット、自分の服も躊躇いなく脱ぐ。

ノーベンバー「俺はあつちを向いてるよ」

コレット 「ううん、こっちに来て——水底に蔦が這ってる」

ノーベンバー、のそのそと近づき、裸のベベとコレットを抱える。泉に足を沈める。少しずつ体を水に浸していく。動きが水面に波紋を起こす。コレット、ノーベンバーに掴まりながら、片手で水をすくい、ベベの体にかけてやる。嫌がるベベ。

ベベ。「ううう」

ベベ。「我慢して」

コレット 「うう！」

コレット「あなたのためなの」

コレット 「ううう！」

コレット 「ううう！」

コレット 「ううう！」

34 三日目 朝 森の水際

光る泉。

水底からとくとくと湧く水。水中に生えた灯籠たちが灯つ

べべ、コレットを睨みつける。鋭い目。

コレット 「子供を育てるってこんな感じ？」

ノーベンバー「ど、どうかな」

泣きじゃくるべべ。

コレット、ため息。

沈黙。

ノーベンバー、抱きかかえた二人をゆっくりと揺する。同期して揺れる水面。鼻歌を歌い出す。べべ、表情が和らぐ。はにかむコレット。鼻歌。二人を揺する。ゆらゆら。調子に乗って水面を叩く。飛び散る飛沫。水面に跳ねる。

コレット 「私の裸見てどう思う？」

ノーベンバー「シエラを思い出すよ」

コレット 「シエラはもっと小さいでしょ？」

ノーベンバー「俺には君も同じに見える」

沈黙。

コレット、大きな呼吸をひとつする。

コレット 「アノードが亡くなって」

ノーベンバー「……」

コレット 「アノードが亡くなって、でも、アノードには親戚もないの。あのね、私たち、知り合いが一人もないの」

ノーベンバー「……」

コレット、目を動かさずまっすぐノーベンバーの胸元を見ている。緊張してこわばる顔。

コレット 「地球を出たあと、私たち、行くところがないの」

唇が震える。

コレット 「あなたさえ、よければ——」

沈黙。

ノーベンバー「——君は勇敢だね」

沈黙。

ノーベンバー「シエラが地上にいるんだ」

雨粒が落ちてくる。

35 三日目 朝 灯笼の泉

ノーベンバー「情けない話だ」

ぼつぼつ。水滴がまばらに水面を叩く。

ノーベンバー「俺が救助計画に入ったのは、ただの私情なんだよ。娘が今も地上のどこかに取り残されている。俺は彼女を取り戻しに地球に来たんだ」

コレット 「……」

ノーベンバー「俺はシエラを見つけるまで、この星を出るつもりはない」

本格的に強まる雨足。反響しない雨音が耳に籠る。

ノーベンバー「ごめんね、コレット、ごめん」

コレット 「シエラを見つかるんでしょ？」

ノーベンバー「うん、見つける。見つけたら、一緒に住もう。」

三人とも、俺と一緒に住もうね」

コレット 「約束よ」

ノーベンバー「うん」

ベベ 「のー」

ノーベンバー「約束だ、ベベ」

二人をきつく抱きしめるノーベンバー。雨が宇宙服の汚れを洗い落とす。黒いヘルメットを伝い落ちる水滴。コレット、手でそれを拭う。ヘルメットをじっと見つめる。じっと見つめる。

水際で声を張るエミル。立ち上がっている。

エミル 「まだか！」

ノーベンバー「今戻るよ！ エミル！」

コレット、ヘルメットをじっと見つめる。

36 三日目 夕方 雨の降る山

ノーベンバー「ここをまっすぐ行けば、到着だ！」

激しい雨風。ノーベンバーの指差す先には、壁のような上り坂。太く背の高い灯籠が辺りにそびえる。雨水が傾斜を傾れ落ちる。

ノーベンバー、ベベを担ぎ、歩き出す。

後ろに続くコレットとエミル。

稲光。ベベ、険しい顔。ノーベンバーに掴まる手を強める。

ノーベンバー、早いペースで足を運ぶ。

コレットとエミル、足を滑らせながら、両手を使い登る。

エミル 「上を見て」

見上げるコレット。灯籠から灯籠へと、電線のように葛が張り巡らされている。風に煽られ揺らぐ。

コレット 「これも誰かの作業ね」

エミル 「目的はなんだろう？」

雷鳴。二人、歯を食いしぼり、登る。身体に叩きつけられる雨粒。手足が土で汚れる。暗雲を抜ける心もとない斜光。暗闇で視界がおぼつかない。

雨の音。

登る二人。

稲光。

コレット 「ノーベンバーは？」

目を細め、前を見るエミル。ノーベンバーとベベの姿が見えない。

エミル 「あいつ、どこまで行ったんだ？」

声を張り上げるコレット。

コレット 「ノーベンバー！」

大股でずんずん歩くノーベンバー。雨風をものともしない。担がれながら、背後を向くベベ。コレットとエミルの姿がない。

ベベ 「うう」

ノーベンバー「どうした？」

ベベ 「これっと」

振り向くノーベンバー。

ノーベンバー「あれ。二人とも遅いな——」

コレットが呼ぶ声が聞こえる。

ノーベンバー「コレット！ エミル！」

ノーベンバーの声が降りてくる。その瞬間、稲光。一瞬だけ、はるか高いところにノーベンバーとベベの姿が見える。

コレット 「進むのが早すぎるわ！」

エミル 「くそっ」

ノーベンバー、後方を向いたまま突っ立っている。

ノーベンバー「待とうか」

立ち尽くすノーベンバー。

雨の音。

傾斜に従って、ノーベンバーの身体が少し傾く。

ベベ 「のー」

異変に気付くベベ。

ノーベンバーの身体が、ゆっくりと、傾いている。

ベベ 「うう！」

ノーベンバー「どうしたんだい？」

平然と答えるノーベンバー。気付いていない。自分の身体が傾いていることに気付いていない。

ベベ 「うううー！」

懸命にもがくベベ。怯えた目。

ノーベンバー「ベベ？」

ベベ 「のー！」

ベベを担いだまま、ゆっくりゆっくり斜めるノーベンバーの身体。

下方のコレットとエミル。ベベの叫び声を聞く。

コレット 「ベベ！ 大丈夫!？」

エミル 「何か変なんだ」

コレット 「……」

エミル 「あいつの歩き方。あれはまるで——ここが坂

だと思っけないみたいだった」

再び稲光。クリアになる視界。

はるか上方で、ベベを担いだノーベンバーが転倒している。

コレット 「ノーベンバー!」

物理法則に従い、坂を転げ落ちてくる二人。

ベベの悲鳴が聞こえる。

なすすべなく転がる二人。無数のツルに引っかかる。

巻き取られ、ピンと張るツル。絡まり、互いに引っ張り合

い、連鎖する。刺激が一本の灯籠に伝わる。

灯籠が灯る。

警光灯のような赤い明かり。ガラガラとした発色。

眠りから目覚める葛たち。

唸りのような摩擦音。

葛が動きを増していく。

巨大なうねりがノーベンバーとベベを包み込む。

コレット 「ベベ!」

エミル 「コレット!」

轟音を伴った葛の波が襲いかかってくる。伏せる二人。坂をずり落ち、間一髪逃れる。顔をあげる。巨大な生き物の腹の上のように流動する辺り一帯。

葛に吞まれたノーベンバーとベベ。死に物狂いでツルを掻き分ける。小さくできた隙間。外が見える。ノーベンバー、そこにベベの身体を滑り込ませる。猛烈な勢いで厚みを増す葛。ノーベンバー、わずかな隙間にベベを押しこみ、脱出させる。

ノーベンバー「ベベ、ここから出るんだ!」

ベベ 「のー!」

ノーベンバー「ごめん、ごめんよベベ! 俺は——ううう俺は——本当に——」

自身の体は完全に拘束され、動けない。ベベ、ノーベンバーと離れるのを嫌がる。泣き叫ぶ。覆いかぶさるツル。ノーベンバーが完全に見えなくなる。

ベベ 「いやあああ」

全力で坂をよじ登るコレットとエミル。ベベを見つける。

目の前に鎮座する岩のような鳶の塊。そこに向かって歩くべべ。引き止めるエミル。

エミル 「べべ、やめろ！」

べべ 「のおお」

コレット 「ノーベンバーが！」

エミル 「おしまいだようもう」

コレット 「そんな！」

エミル 「知ってるだろこの光景——呑まれたら、こう

なったら、終わりだ！」

うなだれる三人。

降りしきる雨。

雷鳴。

唸るべべ。拳を握りしめ、立ち上がる。無闇矢鱈に周囲のツルを引っ張りだす。ギチギチと音を立てる周囲。雨に濡れ滑る手。

エミル 「べべ!!」

刺激された辺りの灯籠が、再度光り輝く。収まりかけた鳶の動きが再び活発化する。激しい脈動。べべの背中にツルが高速でめり込み、皮膚を剥がす。挫けず引っ張り続けるべべ。

衝撃。

目の前の鳶の塊が、弾け飛ぶ。拡散するツル。空中に放ら

れるノーベンバーの身体。ピンと張ったツルに四肢を絡め取られ、数本の灯籠の間に磔にされたように空中に静止する。

コレット 「ノーベンバー！」

エミル、べべを抱き、その場に伏せる。全身でべべを保護する。

コレット 「エミル、べべをお願い」

エミル 「何するんだ」

コレット 「彼を助ける」

空中に張り出した無数の直線。それらに手をかけ、慎重に登るコレット。エミル、無心で見つめる。涙を目にためる。

エミル 「お願い、お願いだから、死なないで、姉さん」

コレット 「死なない」

コレット、器用に鳶に手をかけ、足をかけ、空中のノーベンバーに近づいていく。暴れ狂うツル。時折腕をこする。血が滲む。それも雨に流される。コレット、強い眼差し。

やがてノーベンバーのいるところにたどり着く。地面ははるか下。大きく息を吸い、手を伸ばす。ノーベンバーの左手を掴む。声を張り上げる。

コレット 「ノーベンバー！ ノーベンバー！」

かすかな声が聞こえる。

ノーベンバー——コレット。俺は本当に駄目な大人だね」

コレット 「本当よ！ 何が救助計画よ。救助されてるの

はどっち!？」

ノーベンバー、笑う。

突然締め付けが増すツル。コレットの足にも絡みつく。手を繋いだ二人を引き離そうとするように両者を引っ張る。

コレット 「でもあなたがいなくなると困るの！ あなた

がどれだけ仕事のできない駄目な人でも——
私たち、あなたがいなくなると何にもできなくなっちゃうの！ 本当に何もできないの！ お願い、手を離さないで」

強く握った手。

地上から見上げるエミルとべ。

張力を増す葛。ギリギリと二人の体が反対方向に引っ張られていく。震える手。風に煽られ揺らぐ全身。襲い来るツルがノーベンバーの頭部にびつしりと貼り付き、締め上げていく。

ノーベンバー「だめだよ！ 君まで死んでしまう」

コレット 「黙って！ 離したら絶対許さない」

ノーベンバー「そんなこと言わないで。俺はそんなことを言われると本当に離せないんだよ。頼むよ。離

していいかな？」

コレット 「口を閉じなさい！」

四人のいるところから放射状に、灯籠が灯っていく。

光源の前を通過する雨の線。

一帯が、星空の中にいるような輝き。

手を繋いだ二人。

メリメリ。

ノーベンバーの肩が裂けた。

手を繋いだまま、二人の距離が離れていく。

コレットと繋がれた左腕が、ノーベンバーの肩から少しずつ離れていく。

腕と肩の断面から、無数の線が飛び出ている。

銅線。

金属のパイプ。

筋肉も骨もない。

コレット、目を瞑る。

エミル 「え——」

絶句するエミル。目を見開いて凝視するべ。

腕から飛び出た大量の銅線が、まるでツルのように張り、ノーベンバーの肩から胴体へと接続している。断面からポロポロと金属片が落ちる。銅線が次から次へと引きちぎられる。

いびつな音。堅い何かが割れる音。

ノーベンバーのヘルメットが、締め付けによって破損したのだ。勢いよく外れ、吹っ飛ぶ。そのまま鳶に潰される。

露わになるヘルメットの中身。顔がない。

首元から、防犯カメラのような機械が覗いている。コレットの顔を一点に見つめる黒いレンズ。

エミル 「何だあれ」

その瞬間、最後の銅線が千切れる。分断され、双方向に飛ばされるコレットとノーベンバー。コレットの手には、ノーベンバーの左腕。落ちていく二人。

落ちていく。

37 三日目 夕方 土砂降り

落下するコレット。エミル、疾走する。飛び込む。コレットを休で受け止める。衝撃。

土砂降りの雨。

あたりの灯籠は眠りに落ちる。いつのまにか鈍くなった鳶の動き。

地面に倒れ伏せた二人。エミル、そのままましくし立てる。

エミル 「何だあれ。何だあれ！」

ぜえぜえと息を吐くコレット。エミル、コレットの持つている左腕をひつたくる。信じられないような顔で注視する。

沈黙。

エミル 「知ってたの——？」

コレット 「朝、近づいた時——ヘルメットの中身が見えた」

エミル 「どうして言わなかった!? 何だよあれ、何なんだ。おかしいよ、あいつ——僕たちを騙してたのか？」

コレット 「違う」

懸命に首を振る。

エミル 「——思い込んでる？ 自分のことを人間だと？」

頷くコレット。

沈黙。

エミル 「シエラは——？」

コレット 「わからない」

エミル 「存在するの、か？」

コレット 「わからない！」

エミル、うなだれる。

コレット 「言ってたでしょ。『命にかえても守る』って。

初めから人間は、人を地球に送り込む気なんてなかったんだわ。救助計画は、簡単に命をかけられる、使い捨てのロボットの仕事なのよ」

べべ 「のー」

いつの間にか歩いてきていたべべ。

二人を引っ張り、どこかを指差す。

コレットとエミル、顔を見合わせる。立ち上がる。それぞれノーベンバーの左腕とべべを抱え、指差す方向へ歩き出す。

38 三日目 夕方ぬかるむ野

日が落ち、あたりは暗さを増す。

ぬかるんだ地面に、脱ぎ捨てられた服のように動かない宇宙服。左肩は裂け、そこから穴が空いている。その穴から侵入している葛。首元からは露出した一機のカメラ。歩いてきた三人の姿を捉える。

ノーベンバー「おはよう、子供達」

破損のためか、声が変わっている。

駆け寄るべべ。葛に触まれた胴体に寄り添う。ノーベン

バー、右手で愛おしそうにべべの身体を触る。立ち尽くすコレットとエミル。

ノーベンバー「無事でよかった。無事でよかった……」

コレット 「……」

ノーベンバー「幻滅したかな——俺の顔」

コレット 「え？」

ノーベンバー「コンプレックスなんだ」

カメラが動く。その度にジィと動作音が聞こえる。コレット、背後でエミルの手を掴む。震えている。

ノーベンバー「手間をかけたね。でも大丈夫。船はもうすぐ

そこだ。さあ歩こう」

ビクビク揺れるノーベンバーの体。「あれ？」「あれ？」とつぶやく。全く脚が動作していない。コレット、目から涙がつたう。エミルの手を離し、駆け寄る。肩から侵入した葛を引っ張り出す。ノーベンバーの呻き声。咳き込む。

ノーベンバー「肺をやられた」

コレット 「エミル、そっちを持って」

エミル 「修理できるの？」

コレット 「治療よ」

ノーベンバー「コレット、俺は大丈夫だよ」

コレット 「強がらないで！ あなたの『大丈夫』はもう

こりごり。何も言わないでじっとしてて。船は明日に持ち越しよ」

ノーベンバー「怒るとシエラにそっくりだ」

コレット、腹の穴をまっすぐに裂く。ノーベンバー、悲鳴。

コレット 「麻酔無しよ」

ノーベンバー「無謀だよコレット。無謀だ」

コレット、振り向いてエミルを見る。

コレット 「エミル、ツルをとつてきて。使うと思う」

エミル 「蒿の強度は知ってるだろ？ 千切れっこない」

コレット 「結び目よ」

エミル 「え？」

コレット 「蒿同士を結び合わせるのに、なぜか千切られたツルが使われてた。とつてきて。お願い」

躊躇いのあと、駆け出すエミル。背後の森へ向かう。べべ、立ち上がりついていく。

エミル 「お前……」

コレット 「べべ、エミルをお願い」

コレット、寝そべるノーベンバーの腹に顔を入れる。内部構造を窺う。張り巡らされた銅線。骨格となる柱はひどく錆びついている。そこから詰まった葉を次々かきだすコレット。

いつのまにか分厚い雲は去っている。顔を出した月が頼りない光を落とす。雨足も和らいできた。

39 三日目 夜霧雨

構造を観察し、ちぎれた線の対応関係をさぐるコレット。慎重に結びあわせていく。

ノーベンバー「恥ずかしい」

無視するコレット。

ノーベンバー「腹の中身を見られるのって、裸を見られるより厳しいね」

笑うノーベンバー。笑いに合わせて上半身がゆさゆさ動く。

コレット 「あなたがつて一分も口を閉じれないの？」

ノーベンバー「スーツもズタズタだ——でも」

コレット 「……」

ノーベンバー「おかげで君たちと同じになれた」

コレット 「——エミルが言ったこと気にしてたのね」

ノーベンバー「彼の言う通りなんだよ。俺はずっと安全なところから見下ろして、救命具を投げてただけ。

一緒に溺れる勇氣はなかったんだ。彼を傷つけた」

また咳き込むノーベンバー。苦痛に呻く。

ノーベンバー「もうちよつと痛くなくできない?」

コレット 「ヤブ医者相手に何言ってるの」

ノーベンバー「頼もしいな」

コレット 「はんだごてが欲しいわ」

ノーベンバー「ハハハ」

手を動かし続けながら、小声で話し始めるコレット。

コレット 「私、エミルと一緒にいたくないの」

沈黙。

ノーベンバー「どうして?」

コレット 「ずっと、生まれてからずっと、エミルは私の

代わりに全部やってたの。アノードに反抗するの、本を盗ってくるの、鳥を逃すの、全部私が弱くてできないから代わりにやってたの。本当は、エミルはアノードに何の興味もなかったのよ。あの日、部屋の扉を閉めるのも、アノードに『行かないで』って泣きつくのも——本当は私がやらなき、やいけな、いことだったの! エミルは、人生とか、自分の

気持ち、全部私のために使い果たしてる。本当は、本当は——あの日ビットを蹴飛ばしたかったのは、私なの!」

手が止まるコレット。俯く。

霧雨の柔らかい感触。

ノーベンバー「それは少しも悔やむことじゃない」

内臓のスピーカーから出る機械音声。

ノーベンバー「君たちは素晴らしい姉弟なんだよ」

40 三日目 夜 気配の森

月光の冴える森。

何本かのツルを手に運ぶエミル。割れてポロポロになった爪。新たに結び目を見つけ、両手を使ってほどこうとする。指先に力をこめる。隣で見ているベベ。かなり頑丈な結び目。震える指先を無理やりに振じ込む。ベベ、結び目に噛み付いて手伝おうとする。

エミル 「ベベ、君はすごいよ」

ベベ 「……」

エミル 「君がいなかったら、僕もコレットも、あいつ

を助けられなかった」

背後から物音。振り向く。

何かを引きずるような音。

エミル 「誰かいるのか？」

息を殺して、音の聞こえる方向へ進む二人。灯籠の間をかいくぐる。やがて、ひらけた空間に出る。灯籠のない、空き地のような空間。

中心に人が立っている。

釘付けになるエミル。

シーン31の女性。全身から生えた蔦。

こちらを見る。目が合う。

長い沈黙。

突如、倒れる女性。うずくまり、動かない。

驚き固まる二人。

女性の背中が割れる。

そこから一本の太い柱が生えてくる。

瞬く間に女性の身体を貫き、伸びる。高く高く成長する土色の柱。表面にツルを纏う。高く伸びる。月の方角へ大きくなっていく。女性の肌は、急速に色を失い、茂った蔦に包まれ見えなくなる。

一本の灯籠が出来上がる。

エミルとベベはずっと見ている。

41 三日目 深夜 夜露の暗がり

雨が止んだ。

湿気を孕んだ木立。

ノーベンバーから離れたところで、座って修理の終わりを待つエミルとベベ。コレットが歩いてくる。腰を屈める。初めて三人で食事をした時と同じように、身を寄せあう。

エミル 「容態は」

コレット 「脚は繋がった。動けると思う。でも先は長くない」

エミル 「え？」

コレット 「バッテリーを見たの……ヘルメットよ。あれで太陽光発電してたの。あれがないと——お

しまい」

コレットの震え声。

エミル 「——そうか」

コレット 「彼は助からない」

エミル 「わかった」

コレット 「……」

エミル 「他にも、わかったことがあるんじゃないの
か？」

コレット 「……」

エミル 「僕もだいたい気づいてるよ」

コレット 「——あの人はまともじゃない」

エミル 「……」

コレット 「体内が、ありえない経年劣化だった。彼の持
ち物も全部骨董品よ」

エミル 「そしてあいつはそれに気づいてない」

ぼんやり空を見つめるべべ。

エミル 「僕たちが眠ってたのは一年どころじゃない。
最終便も、救助計画も、ずっとずっと昔のこ
となんだ。あいつはひとり昔の地図を見る。
あの山を登りきったって、たぶん船なんか
ないんだ」

風。水滴がばらばらと落ちる。三人の顔を伝う。

エミル 「この旅は茶番だったんだよ。時代遅れのこわ
れたロボットの、お遊びの救助ごっこに付き
合ってたんだ。本当の救助なんて——とつく
のとうに終わってるのに」

コレット 「彼も見捨てられたんだわ」

エミル 「それに気づかずかずにね。シエラを探してずっと
歩き回ってたんだ。地球を」

眉を歪ませ、目を瞑るエミル。

エミル 「この旅に勝率なんてなかった。賭けですらな
かった」

沈黙。

月明かり。

二人、夜空を見上げる。

星々。

べべ 「のー」

立ち上がるべべ。二人の手を掴む。コレットの手のひらに
は、修理時に走った無数の電撃傷。エミルの指先には堅い結
び目をほどこいた時にできた爪の割れがある。手を引っ張る。

べべ 「いこ」

コレット 「——うん」

手を繋いだ三人。ノーベンバーの元に戻る。

コレットの作った葉のベッドに横たわったノーベンバー。
千切れた左腕も、継ぎ接ぎに元の位置に戻された。あちこち
の裂け目がツルの紐で縫合され、原型を取り戻している。

ジィ、と動作音。カメラが向きを変え、三人の方を向く。

ノーベンバー「どこ行ってたんだい？ 置いてかれたと思っ

た」

エミル 「置いてかないよ」

ノーベンバー「ふふ、わかっているよ。三人ともこっちに来なよ。

冷えるよ。旅も明日で終わりだしさ」

ノーベンバー、べべを右脇に寝かせる。反対の左側にコレットとエミルが寝る。ノーベンバーの身体に身を預けるコレット。隣で背中合わせになるエミル。

小さく固まり、暖め合う四人。

エミル 「森で人を見つけたんだ」

ノーベンバー「えっ」

エミル 「でも、死んだ。灯籠になったんだ」

コレット 「……」

ノーベンバー「そうか」

エミル 「……」

ノーベンバー「君たちは大丈夫。絶対ね」

背中合わせのコレットとエミル。

二人とも、服の裾から、数本のツルが飛び出ている。

エミル 「綺麗な灯籠だった」

42 四日目 早朝 頂上

ノーベンバー「着い、た、ああ、苦しい」

山を登りきった四人。

地平線が見渡せる。ほんのり色づいている。朝の気配。視界を埋める一面の緑。ところどころぼつぼつと光る。

風が鳴る。

ノーベンバー「コレット、エミル、べべ。頑張ったね——俺

たちの船だよ」

ノーベンバーの太い指が指す先には何も無い。

コレット 「素敵ね」

ノーベンバー「あとは隊員の言うことに従ってればばいい

——きつと大丈夫だよ。べべ、乗せてあげる。

おいで」

べべ、動かない。コレットを見る。

沈黙。

ノーベンバー「どうしたの？」

エミル、困った顔でコレットを見る。

コレット、小さな声で話し出す。

コレット 「ごめんなさい、船には乗らない」

ノーベンバー「……」

コレット 「あのね、私たちも一緒に、あなたと一緒にシ

エラを探すわ。三人で決めたの！」

ノーベンバー「……」

コレット 「私たち、船には乗らない。あなたが地球にい

る限り、地球に残る」

ノーベンバー「……」

コレット 「反対しても無駄。私もエミルも、もう——」

反応のないノーベンバー。

動かない。

ベベ 「うう」

コレット 「ノーベンバー？」

動かない。

エミル 「電池切れだ」

コレット、涙が溢れる。

ベベ 「うううう」

懇願するように泣き叫ぶベベ。

ベベ 「ああああ……」

風の吹く台地。

43 四日目 早朝 風の台地

突然、

ノーベンバーが動き出す。

飛び上がる三人。

ノーベンバー、ビクビクといびつな動き。ジイジイと動き

回るカメラ。

いびつに動いた後、急に硬直する。

カメラはコレットを一心に見ている。

レンズが動作する音。焦点を合わせている？

目を丸くしたまま動けない三人。

くぐもった男の声。ノーベンバーの声だとわかるが、今に

も消え入りそうな声質。

ノーベンバー「大きくなったね」

コレット 「ノーベンバー——？」

ノーベンバー「ずっと君を探してたんだ——」

前傾になりコレットの身体に覆いかぶさる。衝撃で傷口か

ら部品がポロポロ崩れる。硬直して動けないコレット。怯え

きった表情。

コレット 「何を言ってるの——」

ノーベンバー「会えてよかった。会えてよかった」

呆然とするエミルとベベ。

ノーベンバー「返事をして、シエラ」

棒立ちのコレット。ノーベンバーの全身を支えながら、絞るように声を出す。

コレット 「——はい」

ノーベンバー「大好きだ、シエラ」

コレット 「うん」

ノーベンバー「シエラ、ごめんね。辛い苦しい思いをさせて

ごめんね。ごめんね」

コレット、唇を噛む。

コレット 「いいの」

ノーベンバー「大好きだ、シエラ」

コレット 「私も——私も」

44

そして、本当に動かなくなったノーベンバー。

コレット、身体をそつと地面に置く。

エミル 「歩こう」

コレット 「……」

エミル 「この星にはまだ人がいる。何かあるんだ」

コレット 「……」

エミル 「歩こう」

踵を返すエミル。目を見張る。

目の前に少女が立っている。

エミルと同年くらいの少女。

昨日見た女性同様、身体中からツルが生えている。が、その程度は比較的少ない。

少女 「その人は死んだの？」

コレットも振り返る。

少女 「あなたたち、誰？」

手を繋ぐ三人。

エミル 「僕たちは——孤児だよ。ただの」

少女 「そう」

こちらに歩いてくる。身体中のツルを擦りあわせて、衣服のようにまとっている。歩きたび揺れる蔦のスカート。

少女 「私も昨日家族が死んだ——これもちらつてい

い？」

ノーベンバーのスーツから剥がれた布片をひよいと取る。

エミル 「君はひとり？」

少女 「仲間がいる。(弦結び^{つるむす})の仲間。みんな孤児」

顔を見合わせる三人。

少女 「あなたたちほど、いたでしょ。みんな怒っている。それで探しに来た」

布片をいじりながら、来た方角へ戻っていく少女。

エミル 「君たちも救助計画にあぶれたんだね？」

少女、振り返る。

少女 「その子孫」

不思議そうな顔。

少女 「救助計画は終わった——二〇〇年前に」

日の出。

燃える地平線。

視界の果てまで連なる深緑の層。大陸に覆いかぶさる年月の重み。空の白さ。

少女が言う。

少女 「来ないの？」

第三部

45

女性の声 「すべての命は葛を宿す」

ブラック。

女性の声 「葛は命と共に育つ。歳をとるほど量が増す」

ブラック。

女性の声 「人間の場合は——産まれてから二十年ほどす

ると、葛は成熟する。私たちの命はそこで終わる。〈灯笼様〉になるのだ」

46 夜

火。

その明かりに照らされる少年の顔。

眼窩。見開いた二つの目。瞬き。

顔中に張りついたツル。

女性の声 「その天寿を全うし永遠となられた灯笼様は、

繋がり、を喪い、寂しがられている。私たち（弦結び）は、彼らをお繋ぎし、その御心を平らかにしてさしあげなくてはならない」

少年、顔を掻く。

爪に引っかかる葛の繊維。ぼりぼりと掻く。もう一度瞬き。

女性の声 「そのために。永い時のあいだ、私たちは命を

つなぎながら、葛を結び続けてきた。そうすれば私たちも、やがては美しい灯笼様のお姿に……」

少年、隣に視線を送る。

隣に、今まで喋っていた女性。

妊娠している。

ツルのはりついた膨らんだ腹。

47 夜村（広場）

女性のさらに隣にいる海淵（かいえん）（20）がへらへら笑う。

海淵 「と、というわけなんで、ハイ」

コレット 「……」

火を囲み、円になった、弦結びの若者たち。

数十名ほどいる。

みな、身体のあちこちから蔦が生えている。葉やツル、他の植物を擦り合わせて衣服のように纏っている。みな個性的。素顔を隠すほど生い茂った者もいれば、ごく一部分にだけ生えた者もいる。

みなあぐらをかいて、円の中心部に座るコレット、エミル、ベベの三人を、不思議そうに眺める。年齢はさまざまだが、目の前にいる海淵以外に、二十歳に達していそうな者はいない。

コレット 「ごめんなさい」

海淵 「えっ」

コレット 「勝手に蔦をほどこしてしまったわ」

海淵 「あ、あ、それは」

女性 「別にいい。もうしないのなら」

みな個性的な生え方をする中、際立って異様な姿態の海淵。身体の上からじゅうから夥しい量のツルが吹き出し、毛むくじらの塊のように見える。顔もよく見えない。十数本、コードのように長いツルが背中から地面を這ってどこかに伸びている。コードの行き先は暗闇で見えない。

へらへらと笑う海淵。

ツルが揺れ、顔があらわになる。

くすみ、皺だらけの肌。

海淵の充血した視線。ベベに注がれる。

ベベ、海淵を見る。目が合う二人。

女性 「ゆっくり休みなさい。外は辛かったろう」

コレット 「私たち、いつまでここにいていいの？」

女性 「いつまでも」

海淵の眼球。

ベベをじいっと見る。

深緑のベベの瞳。

女性 「(エミルの身体を見て) あなたたちもいざれ灯籠になる、尊い命だ。ここから追い出すなんてこ

とはしない」

エミル 「僕たち——ここに住んでいいの？」

女性 「共に蔦を結ぶなら。あなたたちはもう家族だ」

海淵、突然叫ぶ。

全員、見る。

立ち上がる海淵。

海淵 「お、お、お、お、同じ眼をしていらつしやる！」

海淵、ベベを指差す。

海淵 「この小っちゃい御方は、あの子、言い伝えの

獸と同じ眼をしてらっしゃいます！」

女性 「何だと？」

海淵 「海淵は覚えてます！ せせ先代がおっしゃつ

たのは間違いじゃなかった！ この御方は
《けものさま獣様》のうま、生まれ変わりです！ 人の姿
になられて——」

弦結びたちがどつと押し寄せる。べべの瞳を覗く。
困惑するコレットとエミル。

べべもきよんとする。

女性 「鳶色の眼——予言通りだ」

コレット 「この子がどうしたの？」

女性 「この御方は、獣様だ！」

目の色を変えた弦結びの若者たち。一斉に跪く。

べべの方向に恭しく頭を下げる。

海淵 「みなさん、忘れてませんよね。こちらの獣様
を御守りするのは、この海淵の役目です！
で、ですよね!? ああ——なんたる光栄で
す！」

48

それから半年が経った。

冬。

弦結びたちの住む村。

あちらこちらで鳶が結ばれ、繋がったり、別れたりして、
灯籠と灯籠を接続する。複雑に交差する。膨大な量の結び目。
束ねられ、整理されたツル。

柔らかな地面が顔を出している。

ツルを振り乱し跳ね回る子供たち。霜焼けした肌。

見守る年長者たち。

外にはない秩序がある。

49 昼村（広場）

見守る年長者たちの中にエミルがいる。

少し背が伸び、腕に筋肉がついた。

身体から生えるツルの本数も増えた。

数人の弦結びの男子と一緒にいる。白い息。

離れたところに女子のグループ。みなエミルより一回り歳

下に見える。

弦結び A 「(女子を指差す) あいつはどうだ? エミル」

エミル 「……」

A 「じゃあその隣は」

エミル 「興味ない」

B 「お前のことを思って言ってるんだ。お前の年

でまだつがいじゃないなんて普通じゃない」

A 「海淵並みだ」

B 「(笑う) まったく、この半年何やってた」

エミル 「……」

黙りこくるエミル。B、話を変える。

B 「お前の姉さん、今日結ぶらしいぞ」

A 「初結びだな」

エミル、女子グループを見ている。

B 「エミル?」

エミル 「まだ子どもじゃないか」

エミル、男子を置き去りに歩き去る。

50 昼 灯笼の森

コレット 「ううっ」

弦結び C 「息よ」

コレット 「……痛い!」

C 「二つ吸って、一つ吐くの」

コレット 「無理よ!」

コレット、自身の首元から飛び出たツルを引っ張っている。

顔立ちが以前より大人びた。

身体のツルも増えた。エミルよりも量が多く、衣服の間

から何本も覗く。

C 「みんなやっている」

コレット 「……」

ツルを引っ張る。強く。皮膚が裂ける。

苦悶の顔。歯をくいしばる。

コレット 「うううう」

ぎりぎりぎり。

ぶちっ。

首元からツルが抜ける。

D 「それを使って結ぶんだ」

微笑む弦結びたち。

空中に張り出した一本のツル。

コレット、一呼吸おいて、張り出したツルに別の葛を結びつける。反対側からCが実践を示す。おぼつかないに真似るコレット。今引き抜いた自分のツルを使って、葛同士を誘引し、結び目を補強する。

結び目が完成する。

D 「よくやった、コレット」

C 「頑張ったわ」

コレット、恥ずかしそうに笑う。

コレット 「下手かな」

D 「悪くないよ」

C 「結び方も間違っていない」

コレット 「この結び方は何なの？」

C 「先祖代々のものなの」

D 「コレット、次はここだよ」

51 昼村はずれ

男子グループを抜け、歩いて来たエミル。
足を止める。

シーン44で出会った少女、風琴ふうきん(15)がいる。葛を緻密に編んだスカート。しゃがんで、地面を掘っている。何かを探すかのように土を分ける。

見つめるエミル。

風琴、背を向けたまま喋りだす。

風琴 「いつになれば友達を作るの？」

エミル 「だってあいつら、口を開けばつがいの話だ」

風琴 「情けない」

手を動かし続ける風琴。

エミル、隣に行き、掘削作業を手伝う。

風琴 「あなたの姉さんはもっとうまくやってる」

エミル 「コレットは関係ない。何を探してる？」

風琴 「いつもと同じ。何かわからないもの」

遠くから、人々の声。エミル、そちらを見おろす。

村の外の低地で、数人の弦結びが葛を結んでいる。

その中にコレット。呻きながら、自分のツルを千切る。

目を細めるエミル。隣に来る風琴。一緒に見おろす。

エミル 「……あれを毎日やるのか」

風琴 「痛むのは最初だけ」

エミル 「……」

風琴 「じき慣れる。あなたも近いうちやるだろう

——（エミルの身体のツルを触る）だいぶ伸びてきた」

疲れた顔で、結び目を作っているコレット。
遠くの上の方に、エミルと風琴を見つける。

弦結びたちも気づく。

D 「風琴だ」

コレット 「仲が良いわね」

難しい顔をしている弦結びたち。

C 「風琴は——あの子はツルを結ばない。それに

きまりを破るの」

D 「許可もなく村の外をうろつくんだ」

コレット 「……」

C 「コレット、彼に忠告したほうがいい。風琴と一緒にいては、美しい灯籠様にならないわ」

エミル 「ねえ、君たちはいったいなんのためにこんなことをしている？」

風琴 「またその話」

エミル 「毎日毎日、そこかしこを狂ったように結んで。

わざわざ村の外に出る危険を冒してだ」

風琴 「聞かなかった？ 灯籠たちが繋がりを欲して

いるんだ」

エミル

「……」

風琴

「そのために灯籠は蔦を伸ばした。そのために灯籠は命に蔦を植えた。私たちは、そのために生まれて来る。目的があつて結ぶのではない。結ぶことが目的」

エミル

「……」

風琴

「と、みんな言ってる」

52 夕方村

村の最奥部に構える、巨大な建物。

ドーム型の文化会館。〈城〉と呼ばれている。

年月に朽ち果て、蔦に包まれ緑一色に染まっている。

ドームの中央には、一本の灯籠。

城の天井を突き破り、巨大樹のように高く伸びる。

城は、入口や窓、あらゆる隙間が高密度の蔦によつて塞がれ、侵入する者を拒んでいる。

53 夕方城（コンサートホール）

舞台上に、数本のツルがピンと張っている。

指で弾くべべ。

音が鳴る。錆びたハーブのような音。

べべ、続けざまに鳴らす。不思議そうな顔。

海淵 「お上手ですねえ。アハハ」

ホール後方の出入口から入ってくる海淵。毛むくじやらの図体。背中から伸びた十数本の鳶のコードを相変わらず引きずっている。皺だらけの顔を動かしへらへら笑う。

海淵に気づくべべ。にこつと笑う。

べべ 「かいー」

海淵 「獣様は、せ、せ、せんすがおありですな」

べべ、海淵に駆け寄り、手を広げて抱きつく。

狼狽える海淵。不自然な鼻息を撒き散らしながら、ぎこちなく抱き返す。

海淵 「うふ、うふふふ、うふ——あそうだ獣様、獣

様の、妹さまからまたまたお土産をいただき
ました」

海淵が木の実を差し出す。受け取るべべ。

表面に『BEBE』と彫られている。

べべ 「これっつと」

海淵 「妹さまは、その、とても獣様思いですね」

海淵、むくつと動き、近くの観客席に座り込む。

海淵 「さ、獣様、どうぞ、それ鳴らしてください」

べべ、言われた通りにツルを弾く。錆びた音色。

海淵、楽しそうに手を鳴らす。

海淵 「すごいすごい。今度本数を増やしておきます

ね」

「……」

海淵 「他にもなんでも言ってくださいね。獣様のお

望みは、海淵が、な、なんでも叶えて、さし

あげますからね」

「これっつと」

「え？」

「……」

「今コレットって言った？」

「うん」

「そ、それはね」

「あいたい」

「えーつと」

「……」

べべ

海淵 「あ、会えますよ！」

ベベ 「ほんと？」

海淵 「うん。でも、もうちょ、つと先にならないと

だめかなあ」

ベベ 「いつ」

海淵 「え……も、もうちょつとです。ほら、もっか

い鳴らしてみて」

54 夜村（ねぐら）

寝静まる若者たち。

仲のいいもの同士でかたまつて寝そべる。

とぼとぼと歩いてくるコレット。仲のいい同年代の横に座る。

C 「どうだった」

コレット 「今日もだめ」

C 「そりゃそうよ。もう城に行くのはよして。誰も入ってはならないの」

コレット 「もう半年——あの子に会えてない」

C 「獣様に近づくななんて畏れ多いわ」

コレット 「……」

55 夜城（湿った小部屋）

事務室のような小部屋。

朽ちたデスクや椅子。床にも様々な物品が散らばっている。

そして床、壁、天井を這う無数の鳶。

寝そべるベベ。

海淵が上からかぶさる。ベベの頬に顔を擦りつける。

海淵 「獣様、今晩は冷えそうで」

ベベ 「うん」

海淵 「（力一杯抱きしめる）獣様はあつたかいです、うん、

うん。幸せだなあ」

ベベ 「うう！」

海淵 「（力を緩める）あ、ごめん。ごめんなさい。海淵

はその、村の外に出ると、みんなに迷惑かけんです。ほら、（身体を揺する）こんなんだから

——女にももてねえし、その、このまんまだと、き、き、綺麗な灯笼様に、なれないところだ

と、思っていました」

べべ 「……」

海淵 「でも、よかったあ。灯笼様になる前に、こんな、

たいそんなお仕事を、任せました。獣様のおかけです。うふふ（カ一杯抱きしめる）」

べべ 「うう！」

海淵 「獣様はお、おつとめまで、ゆつくうり、

しててくださいね、海淵がずっとお守りしま
すからね」

べべ 「うう！」

いびきをかく海淵。

眠りに落ちる村。弦結びたち。

じき夜が明け、みな動きだす。

何グループにも分かれ、村を出る。

思いおもいの場所で葛を結ぶ。ひたすらに結ぶ。

そのようにして数日が経つ。

エミル

風琴

エミル

「二〇〇年だぞ」

「二〇〇年が何」

「過去二〇〇年で人類は蒸気機関を永年宇宙航行技術に育てた。そのくらいの余裕はあったつてことだよ。そのわりに、君たちはまるで積み重ねがない。葛を結んでちびちび安全圏を拡げてるだけ」

「何が言いたい？」

「文明は埋もれたんだ、失くなったわけじゃない。でも君たちはそれを無視してる。文明を蘇生する努力を放棄してる」

「文明に何の価値がある？ 私たちは灯笼を慰めるために生きている」

「そう教えられただけだろ」

「あなたは違うの？」

「違わない。誰だって教えられたことしか考えない。ただ不自然なんだ。君たちのその教えはいつ生まれた？ 二〇〇年前、君たちの始祖は地球に取り残された。目の前で人類に見捨てられたんだぞ。その時の寂しさを、悔しさを——どこに捨てた？」

56 昼村はずれ

すたすたと歩く風琴。

後ろからエミルがついていく。

風琴、振り返る。向かい合う二人。

風琴 「あなたに言っておく。はっきり言わないとわ

からなそうだから」

エミル 「……」

風琴 「私をつがいの相手にするのは諦めて」

エミル 「えっ」

風琴 「私といると嫌われる」

エミル 「そ、そんなつもりじゃない」

風琴 「じゃあどうしていつも私にかまう」

沈黙。

どきまぎするエミル。

エミル 「知ってる？ 他のやつらはこの地面が平ら

じゃないことすら忘れてるんだよ」

風琴 「……」

エミル 「でも君は少なくとも『地球』を理解してる」

風琴、きよとんとした顔。

真面目顔のエミル。

おし黙る風琴、何となしに地面を見る。土の狭間に、燻ん

だガラス片。かがんで手に取る。じっと見つめる。

その後、ぐつとエミルに顔を近づける。

風琴 「半年つきまとった甲斐があったな」

エミル 「え？」

風琴 「私の家を見せてあげる。あとで」

エミル 「あとで？」

風琴 「今日はあなた、することがあるはずだ」

エミル 「え？」

風琴 「行つて」

エミル 「……」

風琴 「まさか覚えてないの？」

エミル 「……」

風琴 「あきれた」

エミル 「何？」

風琴 「もういい。来て」

57 昼森の傾斜

身体のツルを引き抜くコレット。周到に結び目を作る。慣
れてきた手つき。

仲間の弦結びがコレットに駆け寄る。

D 「エミルを知らないか？」

コレット 「(首を振る) もう長いこと話してない」

C 「今日、彼の初結びだったの」

コレット 「……いないの?」

C 「おととい風琴と一緒にいるところを見たきり

よ」

D 「きつと二人で外をうろついているんだな」

訝しむD。弦結びたちの顔に、嫌悪の表情が浮かぶ。

冷や汗のコレット。

コレット 「私が探してみる」

その時、森の奥、坂の上から獣の音がする。

58 昼森の傾斜

巨大な熊が死んでいる。

車一台ほどの大きさ。逆立った全身の毛。体毛にツルが混じっている。湿り気を帯びた四肢。かすかに蒸気を発する。何十本の葛に絡まれ、首を捻り切られている。ピクリともしない。

駆け寄る弦結び一同。沸き立つ。

C 「獣が獲れてる!」

D 「しばらくはご馳走だな」

熊を見るコレット。息を飲む。

C 「コレット、仲間を呼んできて。人手がいる」

コレット 「う、うん」

踵を返すコレット。走り出しかけ、止まる。

すぐ近くに洞穴がある。覗く。

もう一頭、同じ大きさの熊がいる。丸まり、太い息を発しながら動かない。眠っているらしい。胸を撫でおろすコレット。

弦結びたちも気づく。

C 「家族かしら」

D 「生きてるぞ、どうする」

C 「放っておこう。村までは距離があるし、冬だから当分起きない」

59 夕方村（広場）

薪の割れる音。

捌かれた熊の肉が広場の中心で、火に炙られている。

その熱源を円状に囲む弦結びたち。各々肉のかけらを手に取りかぶりつく。肉の味に顔をほころばす。

コレットもおおそるおそる口にする。

C 「どう？」

コレット 「……」

コレット、こくこくと頷く。笑いあう二人。

黙々と肉を食む若者たち。エミルの姿はない。

60 夕方 風琴の隠れ家

灯籠の森の中にある小さな部屋。

小規模だが、村のように蔦が整備され、編まれたツルが壁となり、小部屋を形作っている。見上げるとすぐ近くに城がそびえる。

風琴 「城が近いから、誰も近寄らない」

エミル、興奮気味に見回す。

部屋は様々な人工物で溢れている。

錆びた郵便ポスト、古びた車のタイヤ、陶製のコーヒーパーツト、大量のガラス片（風琴、持ってきたガラス片をここに投げ加える）、壊れた傘の骨格……。

エミル 「全部ここに集めてたのか」

風琴 「あなたがくれたのも少しある」

エミル 「何か目的が？」

風琴 「首を振る」あなたのいう『文明の蘇生』をして
いるつもりもない。そもそも私はこれらの使
い方を知らない」

部屋の中央には、ツルを編んで作ったハンモック。壁に掛
けられた小物類。いつしか風琴が持ち去ったノーベンバーの
スーツの布片も飾られている。

風琴、傘の骨格を手に取り、タイヤに腰を下ろす。曲がっ
た部分を力を込めて取り外す。柄と中棒だけの剣が出来上が
る。

風琴 「このことは絶対秘密——勝手に外に出るの
は禁じられている。生きて帰れることが極め
て少ないから」

エミル 「それなのに、どうしてこれだけのものを——
なにか特別な方法が？」

風琴 「ない。まだ死んでないだけ」

エミル、失笑。

風琴 「さて、ここに連れてきたからには」

エミル 「……」

風琴 「教えて。使い方」

エミル 「いいよ」

風琴 「全部」

エミル 「全部教える」

風琴 「……」

エミル 「……」

風琴 「座ったら？」

61 朝城（テラス）

文化会館の最上階。張り出した広いテラス。

ベベ、柵の間から景色を眺める。

廊下にいる海淵。不安げな顔。叫ぶ。

海淵 「獣様あ」

ベベ 「かい」

海淵 「落ちんといってくださいねえ」

ベベ 「うん」

海淵 「今日はおつとめの日ですよ。ふふ、頑張りま

しょうねえ」

ベベ、よくわからないといった顔。

海淵 「海淵はお片付けしてくんで、獣様は、ゆっくー

り、し、しててくださいね。落ちんといてく

ださいねえ」

ベベ 「かいー」

海淵 「え、何？」

ベベ、テラスの隅を指差す。

奥まった日陰。何やら大量のものが積まれ山をなしている。

海淵 「それは、ハイ、がらくたです、全部。あんま

り、いいいじらんでくださいね。怪我しちゃ

うから。獣様は、怪我しちゃだめですからね。

絶対ね」

海淵、もぞもぞと去っていく。

がらくたの山を観察するべべ。

たくさん的人工物。土で汚れきり、破損したものばかり。

その中に、宇宙服がある。

62 昼 灯籠の森

灯籠の森を散策するエミルと風琴。遺物を探す。

風琴、傘の剣を振り、蕨の隙間から地面を掻きわける。エ

ミル、見よう見まねで土を掘り起こす。

ざくざく。

作業していると、向こうから誰かが来る。

顔を上げる二人。

コレットだった。

コレット 「久しぶり」

エミル 「……」

コレット 「やっと見つけた」

エミル 「ここは危険だ」

沈黙。

コレット、風琴を見る。

コレット 「風琴ね」

エミル 「用件は」

コレット 「葛を結んで欲しいの」

エミル 「そんなことか」

エミル、立ち上がりコレットに対面する。冷たい目。

コレット 「……ここはいいところよ。乱暴な人はいない。

一緒にご飯も食べてくれる。最初は驚いたけど———適応できる」

エミル 「ああ。ここは安全だ。多分僕らの人生史上最

高にね」

コレット 「でも時々怖くなる———ここの人たちがどれだ

け灯籠を大事にしてるかわかるでしょ？ 彼

女と仲良くするのは構わない。でも———」

エミル 「くだらない」

風琴 「逆の立場だったらあなたも同じことを言いそ

うだけど」

エミル 「うるさいな」

コレット 「エミル」

エミル 「コレット。いつの間にそんな人の心配するよ

うになったんだ？」

コレット 「……」

エミル 「僕たち、あと五年たらずで死ぬんだぞ。なん

でそんなに落ち着いてる？ 何受け入れてん

だよ」

コレット 「私も———」

エミル 「僕は認めてない。姉さんが早死にするのを、

認めたつもりは一切ない」

コレット 「私も嫌よ。あなたやベベが———大人になれな

エミル 「ほら、人の心配ばかりだ！」

風琴 「ねえ」

エミル 「そんな親気取り、誰に教わった!？」

風琴 「ベベは大人になるけど」

63 昼灯籠の森

コレット 「え？」

沈黙。

三人とも、きよとんとする。

首を傾げた風琴。しばらくして、納得したようにつぶやく。

風琴 「あなたたち獣様のこと何も知らないのか」

エミル、声を荒げる。

エミル 「そうだよ！ ベベが城に連れ去られた後、散々

調べた——でも誰も獣様の話題を口にしたが

らないんだ」

風琴 「当然だ。彼ら自身覚えてなかったり、理解し

てなかったりするから。一部の聡い者を除い

て」

コレット 「『ベベが大人になる』ってどういうこと？」

風琴 「ずっと前、弦結びはある獣を捕らえた」

風琴、灯籠の根元に腰を下ろす。表情を変えず話します。

風琴 「彼らはそれを殺さずとっておいた。貯蓄のた

めにね。すると不思議なことにその獣は、い

つまでも生き続けた。一〇〇年以上、生き続け

た。一〇〇年間で、ちょっとしか成長しなかつ

息をのむコレット。

風琴

「十数年前に事故で死んだらしいけど。そのとき海淵の家系が、生まれ変わりを予言した。

誰も信じなかったけど。でも半年前、本当に

来た。同じ色の瞳をした子が、人間の姿で」

エミル 「瞳の色だけでそんなことを信じたのか？」

風琴 「真偽は重要じゃない——長生きする人間が、

私たちにとってどういう意味を持つかわか

る？」

コレット 「……」

風琴 「昔はもっと人手があつて、もつとたくさん

葛を結んでいた。でも弦結びは減る一方。こ

こ数十年でも、私たちの数は半分以下になつ

た。おそらくもう一〇〇年はもたない。焦つ

ていた。灯籠を繋ぐ人手がいなくなつたらお

しまいだから。そんな私達にとって、獣様は

——無限の価値がある」

沈黙。

冷気に湿る灯籠の硬い肌。

棒立ちのコレットとエミル。

白い息を吐きながら、考えを巡らす。

エミル 「風琴。その獣の——その、見た目とか」

風琴 「私が見たわけじゃないけど」

しばらくの間。

風琴 「毛の生えた四本足。尖った耳。太い牙」

目を合わせる二人。

顔面蒼白のコレット。

コレット 「いた」

エミル 「……」

コレット 「オオカミだわ。在庫の中にいた」

コレット、踵を返す。駆け出す。

エミル 「コレット——」

走り去る。

64 夕方城（入場口）

文化会館の入口。元は大きなガラス戸が並んでいたが、全て割れている。代わりに稠密な蔦の壁がくまなく埋め尽くす。

コレット、物陰から様子を見る。

遠くから複数の足音。

五人ほどの男子が、入り口に向かってきている。かつて一緒に行動していたDもいる。

鼓動。

男子たち、入口で立ち止まる。

すると、目の前の蔦がぐにやりと動き、人が通れる隙間をつくる。入っていく男子たち。

コレット、立ち上がる。

足音を殺して駆け寄り、穴に飛び込む。

65 夕方城（ロビー／廊下）

ロビーで立ち止まっている男子たちの目を避け、大階段をすばやく通り過ぎるコレット。長い廊下に出る。床にへばりつく蔦を踏みつけながら、走る。

あたりを見回し、べべを探す。

荒い息。

ロビーにいる男子たち。

しばらくすると、大階段の上から、海淵。

海淵

「いいいらっしやいみなさん。おつとめはこちらです——ちょっと、待っててくださいね。海淵は、ちょっと、し、侵入者さんとお話ししてきますんで、ハイ」

次から次へと部屋を調べるコレット。

照明はない。反射する西日を頼りに探索の目を巡らす。駆ける。

いない、ここにもいない——。

べべ 「これっと」

背後から声。振り向く。

べべ。

コレット 「背が——」

肩で息をするコレット。べべを見る。

コレット 「一ミリも伸びてないじゃない、べべ」

しゃがんで、抱きしめる。

ぼんやりしているべべ。

コレット 「私とんでもないことしちゃった」

茫然自失のコレット。

長い間。

べべ 「ねえ」

コレット 「……何？」

べべ 「こっち」

べべ、コレットの手を引き、歩き出す。

引かれるままについていく。

階段を上り、最上階。テラスを指差すべべ。

66 夕方城（テラス）

オレンジの空。

テラスに出たコレット。べべの指した方向に歩く。

がらくたの山。

宇宙服を見つめる。

ノーベンバーと全く同じ宇宙服。寸胴な体軀。漆黒のヘルメット。ただ、腰から下が欠損し、胴体の中身がこぼれている。脱ぎ捨てられたように無惨に打ち棄てられている。

コレット 「ノーベンバー？」

歩み寄る。

ヘルメットを見る。土埃を被っている。手で払い覗き込む。かつてと同じように、その奥にカメラレンズが光る。

視線を下に滑らせる。

左腕は綺麗にくっついている。他にも継ぎ接ぎだったノーマン・ペーパーの身体とは特徴が異なる。

左腕に刺繍。

〈Rescue Plan 20XX C Babbage〉

コレット 「C……?」

海淵 「妹さまあ!」

声。廊下から海淵が見ている。驚くコレット。

海淵 「あの、し、城に、入られると困るんです」

沈黙。

海淵 「ご案内するんで、でてってくださいませ」

ふと気づくコレット。

ベベがいない。

コレット 「ベベは!？」

海淵 「獣様は、海淵がおひきとりしました、ハイ」

コレット 「どこなの」

海淵 「あの、獣様は、これからおつとめなんです。

邪魔せんといってくださいよ」

その時、

ベベの悲鳴が響き渡る。

67 夕方城（湿った小部屋）

陰湿で、薄暗い小部屋。

床に寝そべり、泣いているベベ。

周りを男子たちが囲まれている。

男子 「動かすな」

男子 「上からだ」

男子 「お召し物をお取りしますね」

ベベの身につけた洋服を、引つ張る。

もがくベベ。

しかし、男子たちが四肢を抑える。びくともしない。

女兒の身体の、もろさを、考慮しない強い力。

ずるりと衣服が剥がされる。

ベベ 「アアア」

金切り声をあげるベベ。

海淵が駆けつける。

海淵 「あああなたたち！ 乱暴に扱わんとつてくだ

さい！ 獣様のお身体にもしものことがあつ

たら——」

死に物狂いで身体をねじるベベ。

逃れられない。

海淵の怒声。

海淵 「泣いとるじゃないですか！ こここんな小っちゃい御方が、あ、こ、こんな、にされて、

怖くないわけないでしょう！」

男子 「最初はみんな泣くものだ」

海淵、隙間からべべの顔を見つめ心配している。

弱々しい声。

べべ 「かい」

海淵 「獣様、だだ大丈夫ですからね。海淵がいます」

べべ 「かいたすけて」

海淵 「うん、うん。大丈夫。これはだいじな、お、お、

おつとめなんです。ね？ 最初は怖いですが、
わかります、痛いかも知れど——でもみんな、
やつてることです」

男子たちの手が下着に伸びる。

引きずり下ろす。

泣き叫ぶべべ。

涙と唾液が迸る。

海淵 「大丈夫だから、ね？ みんな、獣様の、し、

知らない人だけ、いい人たちですよ。うん、
ほんとは、か、海淵がお手伝いして差し上げ

たかつたんですけど、ほら、海淵は身体が、ね、
こんなんだから、あそこも壊れちゃってんで
す。ごめんね。ごめんなさいね。でも大丈夫
です、海淵はここにいますからね」

全速力で泣き声の元に向かうコレット。

小部屋にたどり着く。

惨状。

男子たちの眼がこちらを向く。

何本もの太い腕に床に押し付けられている全裸のべべ。

コレット 「やめて!!」

部屋に飛び込むコレット。

海淵が立ち塞がる。

海淵 「妹さま、やめて」

コレット 「何やつてる!!」

海淵を押しつけるコレット。

男子たちの腕を掴み、懸命にどかす。

コレット 「やめろ！ べべに手を出すな！」

べべ 「アアアア」

地面に転がった海淵。

唸り声をあげる。

すると、海淵の背中から伸びる数本のコードが伸縮する。

上空。

城から突き出た巨大な灯籠が灯る。

城中の蔦がうねうねと動き出す。

目にも留まらぬ速さで、小部屋内にツルが走る。

コレットの腕を絡め取り、壁に叩きつける。

苦痛に叫ぶコレット。

海淵 「邪魔せんでください！　なんでどうして、こ

んなひどいことするんです！」

コレット 「海淵——!!」

海淵 「この御方は獣様だぞ！　灯籠様が授けてくだ

さった、お宝なんですよ！　この御方の御方

のおかげで、私たちの弦結びのち、血を絶

やさずに済みます。それがこの御方の大事な

おつとめなんです。それをな、なんですか！

灯籠様と獣様に対して、ぶ、無礼じゃないで

すか！」

再びコードが伸縮する。

天井を這っていたツルが降りてきてコレットの首に絡みつ

く。

ぎゅう、と絞めあげる。

悲痛の声を出すコレットとベベ。

海淵 「で、つ、て、ください！」

そのまま蔦が、コレットの身体を引きずる。

小部屋から吹っ飛ばす。

壁に頭を強打したコレット。

ベベ 「アアアア！　これ——」

男子 「獣様、動くと危ない」

男子がもがくベベを押さえつける。

うつ伏せにされたベベ。

頬が床に擦り付けられる。

露わになる背中。

かつてノーベンバーを救った時の擦り傷が残っている。

頭から血を流したコレット。

両腕で身体を引きずりながら、ベベの方角を睨む。

コレット 「おまえら、おまえら許さない」

顔中汗だらけの海淵。必死の形相。

再度コードが伸縮する。

コレット、進む方向と逆に身体が引きずられる。

左脚に蔦が巻きついている。

ずるずるずるずる。

コレット 「やめろ、やめろやめろやめろやめろ」
窓。

蔦の隙間から、コレットの身体が放り出される。

真下に落ちていく。

灯籠の灯りが消え、城が再び眠りにつく。

海淵、ぜえぜえと息。

海淵 「はあ、はあ、はーあ、ふ、ふう、みなさん、ふう、すみません、おみ、お、お見苦しいところを」

小部屋へ向き直る海淵。

男子たちに押さえつけられたべべ。

床にへばりついた顔面が、海淵を睨んでいる。

全てを恨む目。

べべ 「うううう」

海淵、怯えた表情。

海淵 「獣様、そんな、怖い顔なさらんでくださいよ」

べべ 「うううう」

海淵 「なんで、なんで——海淵はお仕事を、してただけじゃ、ないですか」

べべ 「うああああ」

68 夕方城下

落下したコレット。

柔らかい地面に突っ伏し、気を失っている。

頭部からは血が流れ、左脚は複雑に曲がっている。

若者たちがコレットを取り囲む。

弦結び 「怪我しているぞ」

弦結び 「誰か治せないの？」

風琴が駆け寄る風琴。

ざわつく周囲。

集まる視線を無視する風琴。コレットの身体を背負う。

そのまま何も言わずに森へ入っていく。

日が沈み、夜が訪れる。

69 夜城（コンサートホール）

舞台の上。

隅で、凍りついている全裸のべべ。

暗幕をひっ掴み、震えている。

海淵 「あの、これ」

べべの下着を持って近づく海淵。

べべ、獣の威嚇のように声を張る。

驚き硬直する海淵。

海淵 「獣様、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさい。海淵は悪いことをしました。御守り係

しつかくです。うん、しつかくだ。ごめんな

さい」

べべの死んだ目。

視界に映る全てに怯えている。

恐ろしい力で暗幕を握る手。

海淵、泣き出す。

海淵 「ごめんなさい！ 許して、ね、許してください、

嫌いにならないで。もう海淵は失敗しません。

だからお願い、嫌いにならないで……」

涙がツルを伝いぼとぼと落ちる。

嗚咽する海淵。

海淵 「ね、獣様だから、ちゃ、チャンスをご覧ください。

許して。海淵を嫌いにならないで」

べべ、がたがたと震え続ける。

70 夜 風琴の隠れ家

コーヒーポットに油を注いで作った、即席のランプ。

小さな火が空間に明かりをもたらす。

藁のハンモックに寝かされたコレット。目を閉じ、気を失った状態。浅い呼吸。風琴とエミルが応急処置に当たっている。

風琴 「脚を縛る。これ千切って」

風琴、自身のツルを揺らしてエミルに持たせる。

エミル、引つ張る。

ぎりぎりぎり。

なかなか抜けない。風琴、顔が歪む。

エミル 「痛むのか？」

風琴 「……」

エミル 「……もしかして、はじめて？」

風琴 「……」

エミル、ツルを手放し、自分のを引つ張る。

咳き込むコレット。

意識を取り戻す。

エミル 「コレット」

コレット 「ゴホッ」

エミル 「命に別状はないよ。動かないで」

コレット 「ベベは」

風琴 「おつとめは中止された」

コレット、息を吐く。

コレット 「エミル」

エミル 「ごめん、コレット。僕は何も——」

コレット 「間違いなかった」

エミル 「……」

コレット 「あの子、背が一ミリも伸びてなかった。怪我も治ってないの。代謝が弄られてる。本当に

あの在庫たちと——オオカミと同じなのよ」

エミル 「……」

コレット 「あの子の寿命はどうなってるの？」

エミル 「……あの日トカゲを見たよね。あれは——千年」

年」

コレット 「……」

エミル 「……」

コレット 「早死によりよつほど地獄じゃない」

コレット、涙が溢れる。

コレット 「エミル、どうしよう、私とんでもないことし

ちゃった」

エミル 「……」

コレット 「あの日、扉を閉めたせいで。鍵をかけたせいで。

アノードの邪魔をしたせいで——ベベは——

こんな地獄みたいところで、途方もない長

い人生を過ごさなきゃいけなくなっちゃった。

私、世界の誰よりも最低なことをしちゃった」

エミル、声を震わす。

エミル 「何言ってる。やったのは全部僕じゃないか」

コレット 「違う——」

コレット、声を上げて泣く。

エミル、言葉を失う。コレットの手を握り続ける。

風琴、ただ見ている。

71 早朝 風琴の隠れ家

再び眠りに落ちたコレット。

その手を握りながら、じつと地面を見つめるエミル。

風琴 「どうして動かない？」

エミル 「考えてる」

風琴 「考えてどうする？」

エミル 「ベベを取り戻すとするだろ——そしたらもう

村にはいられない。この地獄の星で遭難生活だ。そしてもしそれを生き延びてもどうなる？僕とコレットは五年でいなくなる。そのあと誰がべべを守る。もし、べべを安全な形で結びのところにかけたって——彼らだって一〇〇年はもたない。全然足りないよ」

風琴

「……」

エミル

「……」

風琴

「あなた、思ってたよりよっぽどくだらないな」

エミル

「うるさいな」

風琴

「今あなたのやることは、この人が目覚めたときにべべがいるようにしてあげることじゃないの」

エミル

「……」

風琴

「最初からあなたはこの人を喜ばせることしか考えていないんだから」

装備を整えた風琴。隠れ家にあつた傘の柄やランプ、その他武器になりそうなものを腰から下に器用にぶら下げている。

森の向こうから、朝の光が差し込む。

その光を背に、エミルが戻ってくる。

エミル

「ある程度ほどいてきた。言われた通り」

風琴

「これでしばらく村の気は引ける」

エミル

「みんな怒るかな？」

風琴

「これからもっと怒るようなことをするんだ」

エミル

「僕は——君を巻き込んでしまった」

風琴

「あなたにしてはいい判断だ。あなたは一人では何もできない。それに幸い私は使える」

エミル

「……」

風琴

「太陽が一番高くなるころには村も騒がしくなるだろう。そこを狙って動く。あ、それと——」

手招きする風琴。エミル、ついていく。隠れ家に入る。

風琴、指を差す。眠るコレットの真下、地面の土に、字が書き込まれている。コレットからの伝言？

風琴

「何と読むの？」

72 早朝 灯笼の森

隠れ家の近く。

<BABBAGE on the terrace>

73 正午城（入場口／屋根の上）

城の入口を塞ぐ蔦。凄まじい密度。

おつとめの時に空いた穴も閉じてしまった。

エミル 「どっから入る？」

風琴 「上だ」

風琴、腰から大きな鉤を取る。鉤の根元からはツルが直列に結び付けられ、十メートルほどのロープになっている。

風琴、ロープをぶんぶんと回し、高く放る。

頭上から、ガキンツ、と鉤のぶつかる音。

うまく引つかかっただらいい。

感心顔のエミル。

エミル 「（城の外壁を這う蔦を触り）これを登るんじゃないだめ

なのかな？」

風琴 「下手に刺激すると気づかれる。あいつは城じゅ

うの蔦を操れるから」

風琴、鉤の引っかかり具合を確認してから、足を側壁にか

ける。軽い身のこなしで器用に登っていく。

エミル、意を決し、それに続く。

左右交互に手を使い、体を持ち上げていく。

登り終えた風琴が見下ろす。

風琴 「いける？」

腕に力を込め、ぐいっとロープを引つ張る。

エミルも登りきる。息を切らす。

二人はその後も、城の外壁の凹凸に手をかけながら、侵入可能な穴を探し上へ上へと移動する。どこの隙間も蔦が塞いでいる。ツルはみな静止している。

エミル 「勝算はどれくらいかな」

風琴 「知らない。でも悪くはない」

エミル 「そうなの？」

風琴 「いざとなったら私を人質に替せばいい」

エミル 「え？」

風琴 「あいつは私を殺せない」

ドームの最上部にたどり着く。

透明なアクリルガラス天井の上。

周囲を観察するエミル。

村の全貌が見渡せる。弦結びの子供たちの姿。

足元を見ると、ガラス越しに城の廊下。べべの姿はない。

そして見上げると、晴れた青空を突き刺す灯籠。無数のツルを吹き出して眠る尖塔。息をのむエミル。

海淵はお守りしますからね」

海淵、立ち上がる。鳶だらけの身体が揺すれ音を立てる。

海淵 「そう、お、お守りするんだ」

74 昼城（コンサートホール）

暗幕を掴んでがたがた震えるべべ。

目の前には熊肉の破片が置かれている。

数メートル離れた客席に、丸まって眠っていた海淵。

ふっと目を覚ます。

べべを見る。変わらない怯えの目。

海淵 「うううう……」

がたがた。

海淵 「獣様、たた食べてくださいよ、ね？ 昨日から何も口にしたらんじゃないですか、いい子

だから、おめ、お召し物も」

がたがた。

海淵 「おつとめは、しばらくやめます。うんそれが

いい。やめにしますっ。ね、だから、獣様、

そんな、そ、そんなお顔やめて。やめて。怖

くないですよ。大丈夫。海淵は、優しいです。

75 昼城（天井）

灯籠が灯る。

あたりが呼吸を始める。

エミル 「気づかれた——？」

風琴 「伏せて！」

伏せるエミル。

一本のツルが空を裂く。間一髪で躲す。

ガラスを這っていたツルが次々に動き出す。

脚に絡みつく。必死に払い除ける。

風琴 「鳶は意思を持っているわけじゃない。絡み合っ

てそう見えるだけで、一本一本は押すか引く、

かしてるだけ」

エミル 「危ない！」

高速で飛び出したツルが風琴の胸元を狙う。

風琴、横にひよいと避ける。

風琴 「灯籠ひとつ分の量なら見切れる」

大きなうねりが二人に迫り来る。

風琴、エミルの手を掴み、引つ張りながら疾走。

ドームの膨らみを滑り降りる二人。

足元で暴れるツルを跳ねて躲す。

エミル 「あそこだ」

エミルが指差す先、アクリルガラスの一部が破損し、穴が空いている。

向かってくる鳶のうねり。

駆ける二人。

穴に飛び込む。

76 昼城（廊下）

二人、垂れていたツルに掴まる。着地の衝撃を和らげる。

向こうから嘎れた海淵の声。

海淵 「誰かと思つたら」

風琴、すぐさま身を翻す。腰から傘の剣を取り、エミルの右手に持たせ、尖端を自分の首元に突きつけさせる。されるがままに風琴を人質にとる姿勢になるエミル。

コンサートホールの扉から、海淵が出てくる。ベベの細い腕を掴み、無理やり引つ張っている。

海淵 「今度は弟さまじゃ、な、ないですか」

エミル 「その子を渡せ」

ベベ、エミルに気づき、駆け寄ろうとする。海淵、それを制し抱き抑える。へらへら笑う。

海淵 「アハ、その人をひとじちに、とつてるんですか。

へえええ。ひ、ひどいお人だ。妹さまは、優

しいお方だった、毎日差し入れもくださって、

フフ、いたのに、弟さまは、ろ、ろくでもない」

風琴 「私はどうなってもいいの？」

エミル 「自分で言うな」

海淵 「風琴、お芝居しても、無駄だよ。ね、ほら」

海淵、頭をぐねらせる。いびつに曲がつた右耳を出す。

そこから細いツルが数本飛び出ている。

海淵 『いざとなれば私を人質に脅せばいい』で

しょ？ 海淵は耳がいいんだよ。お城で話し

たら筒抜けだよ」

エミル 「――糸電話か」

海淵 「風琴、海淵をなめないで、君をし、し、死なせることだってできるんだ」

風琴 「じゃあやってみて」

海淵 「うるさい！へええその人と仲がいいんだね。

確かにお顔立ちは、うん、整ってらっしゃる、
聡明そうだ」

風琴 「そうでもない」

海淵 「じゃあ海淵はそれよりし、下ってことだね。

君にはわからないだろ、劣ってるってのはね、
すごく恥ずかしいことなんだ。一緒に立って
るだけで、恥ずかしくて恥ずかしくて叫びた
くなることなんだよ」

激昂し、まくし立てる海淵。

エミル、ベベを見る。

ベベもこちらを見ている。

エミル、口を動かし囁むような仕草をする。

ベベ、何も言わずそれを見ている。

海淵 「しし死なすぞ。いいんだね。海淵は獣様を、

お守りするんだから、し、仕方ないんだよ」

風琴 「早くやっつて」

海淵 「ううう」

風琴 「この灯籠、じゃ私は死なない」

海淵 「ううう黙れ！」

憤る海淵。背中から伸びるコードが躍動する。

海淵 「この灯籠様は海淵のお父さんなんだぞ——海

淵の家族をばかにするな!!」

灯籠が輝きを取り戻す。

床の蔦が持ち上がり、エミルと風琴に襲いかかる。

エミル 「ベベ！」

ベベ、ぐいと身をよじり、海淵の左手に、噛み付く。

海淵の呻き。

蔦の照準がずれる。避けるエミルと風琴。

動転する海淵。

隙をつくベベ。腕を押しつけ脱出する。

一生懸命走る。

海淵 「獣様あ！」

二人の元にたどり着く。

エミル 「アラスだ！」

三人、そのままの勢いで廊下の端まで走る。

階段を駆け上がる。

77 昼城（テラス）

エミル 「筒抜けだったじゃないか！」

風琴 「そうかもしれないと思った」

エミル 「まったく頼りになるな」

テラスへ出る。晴れた空。

エミル 「べべ、ここに何かあるのか？ コレットが

——」

べべ、テラスの隅に駆け寄る。

暗がりがあるがらくたの山。

例の宇宙服がある。下半身のない宇宙服。

目を見張るエミル。

エミル 「ノーベンバー——？」

べべ 「ちがう」

棒立ちのエミル。

風琴、テラスの手すりに鉤をひっかけ、脱出の手筈を整え

る。

風琴 「早く。もう来る」

エミル、何かを考えている。

風琴 「エミル！」

沈黙。

考える。

海淵が階段を上る音。

考えるエミル。

やがて、言う。

エミル 「風琴、時間を稼いで——こいつの頭を持ち帰

る」

風琴 「え？」

エミル 「べべの後見人に心当たりがいるんだ。ヘルメッ

トさえあれば——また会える！」

エミル、ヘルメットに掴みかかる。

風琴、腰に縛り付けたコーヒーポットを取り、テラスの入

り口に油をぶちまける。次に黒い鉱石を取り出す。

風琴 「（べべに）離れて」

石を床に叩きつける。

またたくまに燃え上がる。

登ってきた海淵。火の手に驚き、妙な怯え声。

鳶は全く燃えないが、海淵自身は高温に怖気付く。

海淵 「獣様！ おおおお怪我ないですか！」

炎越しに見えるべべの顔。

変わらず、計り知れない恐怖の表情。

風琴がべべを庇い、傘の剣を構える。

火を前にした海淵、その場に崩れる。

海淵

「なんでなんです——どうして海淵のここから行っちゃうんです？ 獣様、ああ、だつて、おつとめをしないと獣様、いつか、ひ、ひとりぼっちですよ？」

宇宙服のヘルメットを強く捻るエミル。

なかなか外れない。

何度も動かしていくうちに、引きずられた宇宙服の身体が日向に出る。

エミル 「くそっ」

宇宙服が喋り出す。

8 2 5 8 1 8 3 7 1 4

エミル 「お——おい」

宇宙服 「マイナス26、8 2 6 1 2 2 6 4 7 2、3 1、

8 3 8 7 0 8 1 7 9 9 8

エミル 「……？」

宇宙服 「……」

沈黙。

宇宙服 「何が——起きてる」

エミル、目を丸くする。

宇宙服、仰向けのまま喋り続ける。

ノーベンバーとまったく同じ声。

宇宙服 「君、今は何年だ」

エミル 「え——」

宇宙服 「俺は何年眠っていた」

エミル 「……」

宇宙服 「君だ、俺の目の前にいる、弦結びの君だ！ 何年経った！」

エミル 「知らない。知らないけど——きゅ、救助計画

から二〇〇年

宇宙服 「——そんなに——」

エミル 「あんたは誰？」

78 昼城（テラス）

宇宙服 「4 1. 8 5 3 5 9 7 2 9 0 1 8、マイナス

3 7. 6 9 4 8 9 3 1 0 6 7 8 8 1 1」

飛び上がるエミル。

宇宙服 「5 0. 8 2 6 6 6 4 8 2 3 9 3、1 1.

宇宙服 「——その間どうしてた？ 俺が寝てた間、君

たちはどうしてた！ 結ぶのをやめてしまっ
たのか？」

エミル 「は？」

宇宙服 「どうなんだ」

エミル 「む、結んでたよ。あんたは誰だ？ ノーベン

バーとはどういう関係が——」

宇宙服 「俺のことを忘れたんだな」

エミル 「……」

宇宙服 「シエラのことも？」

エミル 「何？」

風琴 「エミル！」

振り向くエミル。
テラス中の蔦がうごめく。

海淵が火を突っ切り、飛び込んできた。顔が焼け、もがき
苦しんでいる。風琴、べべを抱いてすぐさま鉤の方へ向かう。

エミル、唇を噛む。

エミル 「悪く」

エミル、宇宙服の身体にまたがり、ヘルメットの根元を強
く叩きつける。鈍い音。全身を使って捻り切る。

ヘルメットが外れる。

宇宙服 「やめろ！」

エミル 「答えてくれ！ あんたは誰だ？」

宇宙服 「俺はバベッジ——救助——計か——」

エミル 「そうじゃない！ ノーベンバーを知ってる
か？」

宇宙服 「ノー——？」

宇宙服、動かなくなる。

エミル、逡巡のち、ヘルメットを抱えて動き出す。

荒れ狂う蔦の中を走る。

海淵 「獣様、おねがいです、いかないで」

鉤のロープを掴んだ三人。

海淵がこちらを見ている。哀願の目。

海淵 「獣様——海淵にチャンスは、も、もう、ない
んですかね？」

手すりを蹴り、滑り降りる三人。

海淵 「獣様あ——」

79 夢

液体の中で、眠るコレット。

透明の蓋の向こうに、アノードの顔が浮かぶ。

コレット 「パ、パ」

蓋が開く。アノードの太い腕がコレットを包む。コレットの髪を撫でる。腕を伸ばすコレット。アノードがその腕を柔らかくあたためる。

80 夜風琴の隠れ家

ランプの明かり。

ハンモックの上で、目覚めるコレット。

目の前に、ベベの姿がある。

コレット、腕を伸ばし、ベベを包む。

ベベはツルを編んで作った服を身につけている。

エミル 「風琴が編んでくれた」

コレット 「ありがとう、二人とも」

エミル 「これ、土産」

エミルがヘルメットを出す。

コレット、言葉を失う。

コレット 「嘘……」

エミル 「これでノーベンバーを生き返らせる」

コレット 「……」

エミル 「僕らのあと——あいつにこの子のことを頼も

うよ。もちろん機械にだって寿命はあるけど」

みるみる目に光を取り戻すコレット。

エミル 「五年よりずっとまじだろ」

81 夜城（コンサートホール）

すすり泣く海淵。

舞台上にうづくまり、ベベの着ていた服を握りしめる。

海淵 「うっ、うっ」

ピンと張られたツル。

手を挙げ、弾いてみる。音がする。錆びた音色。

左手を見ると、ベベの噛み跡。

82 夜風琴の隠れ家

ベベ、疲れ果て眠っている。

コレット、ハンモックの隙間からその寝顔を覗く。それを

見るエミル。風琴はいない。

コレット 「私、この子に謝っても謝りきれない」

エミル 「……」

コレット 「本当は、ノーベンバーに渡して終わりじゃない

けない。この子の一生分、私が責任を取らなきゃいけないはずなのに。千年——？」

エミル 「……」

コレット 「何やつてもおつりがくるじゃない」

風琴が入ってくる。両手いっぱい抱えた食糧。床に寝そべるべべを跨ぎ、室内のものを片付ける。

風琴 「おしゃべりもいいけど、あなたは早く身体を

治して。村のやつらがこの子を探して動き出した。ここもいざれ見つかる」

コレット 「うん」

風琴 「流石に次海淵に会ったら、手がつけられない」

エミル 「君、彼とどういう関係なんだ？」

風琴 「話は終わり」

風琴、ランプを消す。

どかっとべべの横に突っ伏し、数秒で寝息をたてる。

夜空に満ちる月の光。

眠る四人の間にも、細い隙間からすっと入ってくる。

コレットとエミル、差し込む光越しに一瞬、目が合う。

コレット 「海淵のことなんだけど」

エミル 「……」

コレット 「彼、城じゅうの蔦を操ったじゃない」

エミル 「きっと背中のコードで操作してるんだ」

コレット 「私ずっと考えてたんだけど、その仕組みって
きつと——」

エミル 「その話明日じゃだめかな」

コレット 「だめ。聞いて」

エミル 「似てきたな」

コレット 「誰に？」

エミル 「僕の嫌いな奴」

諦めて腰を据えるエミル。

夜通し会話する一つ違いの姉と弟。

灯籠の森に風が降りる。

空を薄く隠す夜の靄。

冷気がツルの隙間を滑る。

83 朝 風琴の隠れ家

目を開ける風琴。鼻をすする。

上体を起こして、すぐに気づく。

三人ともいない。

隠れ家を飛び出す。

目が眩む。

雪が積もっている。

風琴 「なにやってる」

コレット、エミル、ベベの三人が積もった雪をかき混ぜている。コレットは左脚を引きずり、片方をエミルに支えてもらっている。ベベ、雪を舞い上げ、はしゃぐ。宇宙服から取ってきたヘルメットを被り、上半身を隠している。

ベベ 「ふーき」

エミル 「起きたか」

風琴 「コレットあなた、治す気あるのか？ 今すぐ

戻って」

コレット 「ごめんなさい、エミルと話してたら、降って

きたの。それで、楽しくなっちゃって」

エミル 「風琴、ノーベンバーのいる山まで、往復でど

れくらいかかるかな？」

風琴 「三日。——何なの？」

エミル 「今日から行く。三日でノーベンバーを連れて

くる」

風琴 「は？」

エミル 「案内を頼みたい」

風琴 「コレットはどうする」

コレット 「私はここで待つわ」

風琴 「ばかしてる」

エミル 「風琴、僕たち見つけたんだ。この子を守る方法。今後五年じゃなくて、一〇〇年でもなくて、ずっと——この子の人生の最後までに責任を持てる方法」

風琴 「……」

エミル 「ただ、それは何重もの賭けなんだ。でも僕らは決めた。この賭けのために僕らの命を使い果たそうって。そのために少しでも勝機を高めたい。急ぎたいんだ」

風琴 「ここでコレットが見つかったらどうする」

ベベ 「ベベがまもる」

ヘルメットを持ち上げ、顔を出すべべ。屈託のない笑み。

風琴 「——ひどい賭けだ」

エミル

「それで風琴。これだけお世話になっておいて、
本当に頭が上がらないんだけど——その上で
頼みたい」

風琴をまっすぐ見つめるエミル。

エミル

「僕と来てくれ」

沈黙。

風琴、表情筋を一つも動かさず、言う。

風琴

「あいつの言うとおりで。あなた、ろくでもな
い人だな」

84 一日目 朝村

村じゅうが騒がしい。

若者たちが、森へ出たり入ったりして連絡を取り合っている。
ちらほら「獣様」「獣様」と声が湧く。

広場の中心に、海淵が突っ立っている。鳶に覆われた毛むくじゃらの身体。伸び切ったツルが表情も隠し切っている。

何もせず、何も言わず、突っ立っている。

85 一日目 昼 風琴の隠れ家

ハンモックと一緒に横たわるコレットとベベ。
穏やかな揺れに身をまかせる。

コレット 「眠れない？」

ベベの髪をつまむコレット。

コレット 「私も」

ベベ 「のー」

コレット 「もうすぐ会える」

コレット、身をよじり、ベベと向き合う。ベベの頬をつく。

コレット 「友達がいたの。ビットっていう」

ベベ 「……」

コレット 「ちよつと変な人だったけど」

ベベ 「びつと」

コレット 「そう。でもすごくいい人。私とエミルの命を
救ってくれたの。彼がボタンを押してくれな
かったら、多分、あの箱に閉じ込められて飢
え死にしていた。ベベをひとりぼっちにした
わ。彼のおかげで私はあなたと一緒になれた
のよ」

ベベ 「……」

コレット 「ノーベンバーに会えたのも——」

臉を落としているベベ。

ベベの鼻を触るコレット。やはり眠っている。

コレット、ゆっくりとハンモックから降りる。

86 一日目 昼 真つ白な道

足首の高さまである雪を踏みつけながら、進むエミルと風琴。

早足で灯籠の狭間をくぐり抜ける。

エミル 「海淵はどうやって葛を操ってるか」

ざくざく。

地面を這う葛を刺激しないよう、最低限の動きで歩く風琴。

エミルもそれに倣う。

エミル 「あの灯籠から伸びるツルと、自分のツルを結

んでるからだ。うまく組み合わせを作って、

自分の身体の動きを、城じゅうの葛の動きに

変換してる」

風琴 「あいつにしかできそうもないな」

エミル

「でもね、君たち弦結び全体も、同じことをやってたんだ」

「……」

風琴

「弦結びの結びかたには二種類あるよね」

エミル

「うん」

エミル

「一つ目は、二本のツルを、一本のツルに結びつけるやり方。二つ目は、空中に張った支えのツルに、二ヶ所、反対方向から結びつけるやり方」

「……」

風琴

「それを見てコレットが気づいた。この結びかた——あまりに作為的なんだ」

エミル

「どういうこと？」

風琴

「一つ目で、もし二本のツルのうちどちらかを引つ張ったとしたら、どうなる？」

エミル

「繋げたやつも引つ張られる」

風琴

「そう、奥の一本を引つ張るにはこれまたはORこれを引つ張る必要がある」

エミル

「……」

風琴

「二つ目は、こつちを引つ張ると逆にこつちを押される。こつちでないNOT結果が伝わるんだ」

風琴 「何の話をしてる？」

エミル 「ベベを救う話——もとい、世界を救う話だよ」
歩く。歩く。

エミル 「二十世紀。D・ヒリスは、マルバツゲームに
必勝する〈コンピューター〉を組み立てた」

風琴 「コンピューター？」

エミル 「考えるもののこと。すごいのが、そのコン
ピューターの部品——ただの木製の子供用おも
ちゃだったんだ。金属も、電気すら使っていない」

風琴 「……」

エミル 「コンピューターの本質は媒体じゃない——そ
れがなす論理にあるんだ。AND、OR、
NOTの三つをこなす能力があれば、媒体が
電気である必要はない。ニューロンでも、蒸
気や水の流れでも——」

風琴 「葛でも、と言いたいのがね」

エミル 「〈額〉ANDは、ORとNOTの組み合わせ
で作れる。〈ド・モルガンの法則〉が保証して
いる」

風琴 「うまくいきすぎじゃない？」

エミル 「うまくいきすぎるとなってるんだ。いい

かい、本質は論理といっても、運用するには
実際的な問題が鎌首をもたげる。例えば増幅
機能。多くのコンピューターは〇と一を資本に
するけど、流れる媒体は、実際はどうしても
弱まるから、それをカバーする——〇・八や〇・
七を一にする——増幅機能が必要になる」

足を止めるエミル。
近くにある灯籠を触る。

エミル 「でもそれもうまくいった。灯籠の性質——引つ
張ると少量の刺激でも活性化する性質って、
まんま〈トランジスタ〉なんだよ！」

風琴 「……」

エミル 「物量的な問題もある——集積回路は相当の密
度を要求するから……けどこれもうまくいく。
こつちにはそれをカバーするだけのリソース
——地球上の全生物分の葛と灯籠、そして
——嫌になるくらい長い時間があるんだ！」

風琴 「……」

エミル 「……どうかな」

風琴 「わかるように言って。あなただけ楽しそうに
してるのが気に食わない」

エミル 「簡単に言うと、君たち弦結びは——」

目を輝かせたエミル。

エミル 「この星をコンピュータにしようとしてる」

87 夢

アノード 「コレットのために作ったんだ。食べてごらん」

口に当たる温かさ。

コレットは、アノードの膝の上に乗っている。

アノードの左腕が、コレットの身体を寄せ付ける。コレット、その腕に手をおく。アノードの肌を触って確かめる。

またスプーンが近づく。

コレットは、大きな口を開ける。

88 一日目 夕方 雪の積もった山

かつてノーベンバーと登った山。

雪に覆われ、表情を変えている。

風琴の持つてきた小さなツルハシ。それを頼りに傾斜に飛

び込んでいく二人。

エミル 「救助計画からあぶれ、取り残された人間たちは、鳶に蝕まれた地球をどうにかする策を編み出した。それが鳶のコンピュータを作る計画」

風琴 「これだけ氾濫してる鳶を思いどおりにつなげるといふの？」

エミル 「人間には無理だろうね。記憶力も思考力も到底足りない。でもそれを兼ね備えた協力者がいた。救助計画の隊員だ」

風琴 「隊員？」

エミル 「テラスにいたあれだよ」

風琴 「あの死にかけ」

エミル 「なぜか死にかけて、放置されてた。多分そのせいで、弦結びたちは結ぶ指針を失って、目的もなく結び目を増やし続けるようになったんだ」

太陽が山脈に隠れる。

分厚い雲が星々を隠す。

89 一日目 夕方 風琴の隠れ家

目覚めるコレット。

海淵 「おはようございます」

入り口に鶯の塊が立っている。

飛び出した四肢以外、顔も見えない。

呼吸しているのかもわからないくらい、音を殺し、ただ入り口に突っ立っている。

戦慄するコレット。

べへはまだ横で眠っている。

海淵 「獣様をおつれしに、まいりました」

コレット 「渡さない」

沈黙。

コレットの震える呼吸。

海淵 「弟さまと風琴はおらんのですね。どこです」

コレット 「消えて」

海淵 「あの、に、にくたらしい、弟さまと、風琴はど、どこに、おるんです」

沈黙。

泥のように重い空気。

空では、黒雲が堆く目方を増す。

海淵 「海淵は、弱かったです」

コレット 「……」

海淵

「海淵は風琴を、あの子を、し、死なせる勇氣がなかったです。でももう次は、大丈夫。海淵は、獣様のことを、いつだって、お、思っています。次は絶対、あ、ああ、あいつら、を、死なせてみせます」

目を反らせないコレット。

海淵

沈黙。

海淵

「海淵はね、獣様に、お、おつかえする前まで、猟師だったんです。猟師つつつてもね、簡単です。村の外で、むやみやたらに、つ、鶯を動かすんです。そしたら勝手に暴れまわるでしょ、それを、繰り返して、ね、獣をしし死なせるんです。簡単でしょ。ばかでもできるお仕事でしょ。一家代々これなんです」

海淵、小刻みに動く。よたよたとコレットに背を向ける。

海淵

「夜は、みんな村の中で寝るから、安心です。安心して、フフ、死なせられます。獣様、また後でね。絶対また、お連れにあげりますか」

らね」

海淵、去る。

しばらくの間。

コレット、倒れこむ。

緊張の糸が切れ、激しく咳き込む。

真っ青な顔。

太陽が落ちる。夜の冷え込みが身体を襲う。

90 一日目 夜 頂上

雪が降りだす。

台地の中央に、ノーベンバーが仰向けに寝ている。

別れたときと同じ姿勢。

エミル、背負っていたヘルメットを持ち、屈む。半年間晒

されていた剥き出しのカメラを、ヘルメットで覆ってやる。

接合部の銅線を漁る。

風琴、後ろで見ている。

やがて作業を完了するエミル。

ヘルメットが、ノーベンバーの首と綺麗にくっついた。

日光がなく動かない。

エミル 「朝まで待つ」

風琴 「こっちに来て」

二人、ノーベンバーの身体にもたれ、身を寄せて丸くなる。寒さに身体を震わす。降雪の勢いが強まってきている。

地平線。

真っ暗のなか、ぼつりぼつりと灯籠の光。

静寂。

肌を凍てつかせる雪。二人の髪をぐつしよりと濡らす。

二人、もつと肌を寄せ合う。感覚がからまる。

エミル 「計算する癖がついてたんだ」

風琴 「……」

エミル 「今、自分の人生は幸せなのか。いいことと悪

いことを、数えて、足し引きした。何回もやっ

てた」

ざあああ……。

森のどこかで音がする。

二人、顔を合わせる。

エミル、風琴の睫毛についた雪粒を払う。

ざああああ……。

今度は目の前に広がる平地から音がする。

たくさんの光の群れ。

風琴 「エミル」

エミル 「うん」

風琴 「怖い」

エミル 「うん」

風琴 「こつちにきてる」

エミル 「わかつてる。だから今言う——」

光の群れが膨らみ、縮み、躍動する。

ざああああああああ……。

音量が大きくなる。

だんだんと明るくなる。

エミル 「全敗だった。何回計算してもだめだった。僕は不幸せだった。でも、でも今君の隣にいる

と——もしかしたら今は——もしかしたら差

し引きで、プラスかもしれないって——」

轟音が襲い来る。

91 一日目 夜 葛の嵐

積もった雪を引つ掻き回しながら、葛の嵐が飛び込んでくる。ツルの絶叫。エミル、風琴の身体にかぶさる。悲鳴をあ

げる風琴。飛び散る雪が降りかかる。迸る葛が皮膚を荒く削り取る。轟音。暴れる葛が雪崩を引き起こす。背の高い灯籠が三人に無慈悲のスポットライトを当てる。高速で駆け巡るツルがエミルの体のツルと絡まる。ぶちぶちと千切れる。出血。雪を染める。

再びの轟音。無数の発光。太陽を凌駕するまげゆき。

うねりがエミルを呑みこむ。風琴から引き剥がされるエミ

ル。手を握った二人。途轍もない力で引つ張られる。筋繊維

の千切れる音。葛の暴風。顔面を擦る。叫ぶ二人。

手が離れる。

引きずり空中に放られるエミル。葛に食われる。力任せに

折りたたまれる半身。次から次へ群がるツル。エミルの身体

を貪る。内臓を押し潰す。血を吐くエミル。灯火を失いかけ

た眼差しは、風琴を見ている。

泣き叫ぶ風琴。

収まらない葛の嵐。

エミル、命を絞った声。

エミル 「ノーベンバー！」

三人を取り囲む灯籠の光。

灯籠の光。

エミル 「ノーベンバー起きろ！」

巨大な宇宙服の体が、
持ち上がる。

エミル 「ノーベンバー——」

漆黒のヘルメットが、

エミルを見つめる。

エミル 「その人を守れ!!」

92 二日目 早朝 吹雪

吹雪。

真っ黒の視界。

宇宙服が、雪を踏みつけながら、まっすぐに走る。

胸元に、風琴を抱えている。

ザクザクザクザク。

ひたすら走る。

涙を流している風琴。

ヘルメットの内側から、嗚咽の音。

ノーベンバーも泣いている。

吹雪。

93 二日目 朝 風琴の隠れ家

吹雪が吹き荒れる。

雪に道筋を作りながら、とほとほと動く鳶の塊。

隠れ家の入り口に到着する。

入り口に、コレットが立っている。頑強な木の枝を杖にし

て、一人で立っている。意志のある瞳。片手はべべと繋いで

いる。しっかりと繋いだ手。二人して、海淵に対峙する。

鳶の間から覗く、海淵の眼球。

海淵 「獣様」

コレットとべべ、後ろを向く。

海淵を置きぎるように歩き出す。

左脚を引きずるコレット。時折べべが支え、一步一步進む。

海淵、よろめきながら、それを追う。

94 二日目 朝 森の傾斜

斜面を登るコレットとべべ。

びゅうっ。

吹き降りる強風。二人の目を刺す。なびいて暴れる髪の毛。

二人とも、目を細めながら、小さな一步を重ねる。時折雪に滑り、体勢を崩す。その度に決死の力で立ち直す。

後ろから追う海淵。ふらふらとおぼつかない足取り。風が煽るたび、不自然によるける。茂る蔦の中心からは、うろううと呪詛の呻きが滲む。

海淵 「獣様、獣様あ！ こつちを見て」

コレット 「べべ、こつちよ」

べべ 「うん」

海淵の声に振り向かない二人。

上方をただ見据える。

海淵 「なんで、なんでなんですか。獣様、海淵は、

獣様が、だ、大好きです。獣様も海淵が、ゴ

ホッ、ゴホッ、大好きだったじゃ、ないですか。

ね？ またあれ鳴らしくださいよ。獣様、鳴

らして！ 海淵はあれ、大好きです。あの音

を聞くと、ゴホッ、幸せです。こつちを見て」

吹雪が弱まってくる。

雲が明度を帯びる。太陽が高くなっている。正午が近い。

登り続けるコレットとべべ。

ついていく海淵。

海淵 「獣様、またあれ、ぎゅってやつ、していいん

ですよ。その、海淵は、ちょっとその、恥ず

恥ずかしかったけど、ね、やっていいですよ。

海淵、おつきあいますから。ね？ ゴホッ

ゴホッ、こつちを見て。海淵は、獣様の、ま

あもあるい、ゴホッ、が、好きなんです、ウ

フフ」

コレット、体勢を崩す。苦痛の目。

雪が崩れぼろぼろと転がる。後方の海淵に降りかかる。

海淵

「止まってください、い妹さま。どちらへ行か

れるんです。あ、危ないですよ。獣様が、お

けがなさるかも。妹さまは、あいつあいつら

とは、違います、おやさしい、ゴホッゴホッ、

ゴホッ！ おやさしいおやさしいおかたです、

海淵はしつてます」

コレット 「私、優しい人じゃない！」

海淵 「何をおっしゃるんです。とっても、ゴホッ様

のことを、すごく、だいにだいににされて、

おられるじゃない。獣様、聞こえますか？」

コレット 「本当よ！ 私、ちっとも優しくないわ！」

コレット、振り向く。

全く間隔が縮まっていない。

コレット 「なんであんなに遅いの——」

振り向く。

海淵の身体から、灯籠が生えてきている。

95 二日目 昼森の傾斜

雲を突き抜ける日の光。

コレットとベベ、立ち止まる。

海淵

「獣様、待っててね！ いまそ、そつちにゴホッ、行きますね。海淵は獣様が大好きなんです。ほ、本当なんですよ。獣様は、海淵に、やさしく、ゴホッしてくださいさる、か、海淵の、話を聞いて、くださる、海淵の、ここ、こんな、こんな、こんな見た目なのに、ぎゅって、して、ゴホッゴホッ、くださる！ ねえ！ 獣様！ こつちを見て!!」

コレット

「見ちゃだめ」

海淵に背を向けて、動かない二人。

ベベ、目を潤ませている。

しばらく海淵の咳き込む声が聞こえる。

静かになる。

コレット 「あれ——？」

96 二日目 昼森の傾斜

海淵

「やった！ やった！」

海淵の腹の肉を破り、土色の柱が伸びていく。

海淵

「やっと、やっとです。海淵も、灯籠様になります！ 獣様、みて！ 海淵は、がんばりました、お仕事をたくさん、や、やりました、ほら、すぐく、立派でしょ」

腹から伸びる柱。重力に負け、垂れ下がる。

絶句するコレット。

今度は首元から別の柱が生えだす。

海淵

「痛い！ 痛い痛い痛い！ ゲホッ」

海淵の口から血液が漏れる。

状況がわからずあたふたしている。

ベベ、たまらず振り返る。

ベベ

「かい——」

城の灯籠とは比べものにならないほど貧弱な突起が、海淵

の首元から飛び出ている。腹の灯籠はち切れそうなほどに膨れ、海淵は重みに耐えかね膝をつく。全身の鳶は、急速に色を失い、枯れ果てた。葉がぼろぼろと落ち、海淵の全身が露わになる。骨ばった胸部。いつかの炎に焼けただれた顔面。噛み付かれた左手の跡。

海淵、よくわからないといった顔をしている。

海淵 「あれ——おわり？」

べべ、涙が溢れる。

海淵 「なんでまだいきてるの？」

沈黙。

海淵 「獣様あ——どうして——」

海淵。ゆっくり近寄ってくる。

コレット 「こないで！」

地面に突き刺さった腫れぼったい灯籠が雪をずると削る。

べべ 「かい！ かい！」

首元の灯籠は頼りなくしなる。

海淵 「海淵の、灯籠様、なんか、みんなとちが——」

べべ 「かい！」

コレット 「止まって海淵!!」

腹の灯籠が、張っていたツルに引っかかる。

引っ張られたツル。

先端で、他のツルと結ばれている。

そのツルも引っ張られる。

連鎖して引き合う。

次々と引き合う。

最後のツルは、雪の中に突き刺さっている。

それが、動く。

「ゴォッ!!」

雪の中から、一頭の熊が

海淵に飛びかかる。

97 二日目 昼森の傾斜

べべ 「かいいいいい」

絶叫するべべ。

斜面を転がり落ちた海淵。

熊に食われている。

コレット、膝から崩れる。

べべ 「あああああああああ」

意識の失せた海淵。

熊が首元の灯籠を、齧って千切る。

赤ん坊のように喚くベベ。

ベベ 「ごめんなさい！ かいごめんなさい！」

海淵の方へ走りだす。

雪で滑る。

転がる。

その身体をキャッチする、大きな腕。

ノーベンバー「やあ」

静寂。

コレット 「ノーベンバー——」

ノーベンバー「二日で足りたよ」

コレット 「私、いい子にはなれなかった」

ノーベンバー「君はいい子だよ」

98 夕方城（テラス）

コレット、ベベ、風琴の三人が座っている。

雪雲は消え失せた。

太陽の温度が肌に届く。

三人とも、泣き腫らした後の紅潮した顔。

疲れ切った目で空を眺める。

風琴 「結局」

不安を拭うように身体をくつつけあう。

風琴

「私たち弦結びは、始祖の計画のための部品で
しかなかったのか。結ぶために生まれて、結
ぶために生きる」

ぶために生きる」

コレット 「だからこそよ」

風琴 「……」

コレット 「誰だって自分の人生が自分以外の誰かのため
に動いてるなんて嫌だわ。だからこそ始祖は、

新しいイデオロギーを敷いた。自分のために
結び、結ぶことに胸を張れる〈灯籠信仰〉をね」

結び、結ぶことに胸を張れる〈灯籠信仰〉をね」

風琴 「……あなたも難しい言葉を使う」

コレット、微笑む。

風琴 「始祖はコンピューターなんか作って何をした
かったの？」

かったの？」

コレット 「それを今から訊くところ」

コレットが顎で指す先。

テラスの向こう。

手すりに凭せかけられた、上半身だけの宇宙服。

その目の前にかがむノーベンバー。

自分のヘルメットを外し、対面する宇宙服にかぶせる。

風琴 「……」

コレット 「ついでに、この冒険の勝率もわかる」

コレット、ベベと手を握る。

風琴が反対の手を握る。

宇宙服と会話するノーベンバーの背中を見つめる三人。

やがて三人、すくと眠りに落ちる。

99 一人称視点

暗闇。

暗闇。

暗闇。

? 「お——と」

声。

よく知っている声。

自分の声だ。

? 「生きてるか？」

喉を絞る。

自分 「生の定義による」

? 「そりゃそうだ」

光。

目が眩む。

ゆっくりと視界が形になる。

目の前に誰がいる。

目を凝らす。

宇宙服。

ヘルメットのない宇宙服だ。

? 「俺はノーベンバー・バベッジ。救助計画のク

ルー。君は？ どうして同じ苗字なんだ？」

ノーベンバー？

自分 「ノーベンバーって、君の名か？」

ノーベンバー「そうだよ」

ノーベンバーが左腕の刺繍を掲げる。

〈Rescue Plan 20XX N Babbage〉

自分 「なるほど。Nのノーベンバーか」

ノーベンバー「君は？」

自分 「ならば俺は、チャーリー・バベッジだ。Cの

チャーリー」

ノーベンバー「よろしくチャーリー。ところで聞きたいことが無限にあるんだけど」

自分 「いくらでも答えよう。俺のメットを搔っ攫わない限り」

ノーベンバー「君が、弦結びの——その、犯人かい？」

自分 「人聞きが悪いな」

ノーベンバー「意味わかるかな」

自分 「ああ——その意味で言えば、俺は実行犯だ。

首謀者は、シエラ」

ノーベンバー「……」

自分 「……」

ノーベンバー「今なんて言った？」

自分 「俺はシエラに会った」

ノーベンバー「シエラ・バベッジ？」

俺は頷く。

ノーベンバー、頭を抱える。

ノーベンバー「シエラは俺の娘だ」

自分 「知ってる。俺の娘でもある」

ノーベンバー「どういう冗談だ？」

自分 「……」

なるほど。

自分 「君はまともじゃないんだな」

ノーベンバー「なんだって？」

自分 「俺のヘルメットをしてみる」

ノーベンバー「……」

自分 「何が映ってる？」

ノーベンバー「見たくもない、俺の顔だ」

こいつは自分を人間と思っている。

自分 「君、食事はどうしてる？ 排泄は？」

ノーベンバー「……君と同じだよ」

自分 「答える」

ノーベンバー「スーツの生理維持機構がなんとかしてくれ」

自分 「二〇〇年間、ずっとか？ その体積で？ エ

ネルギー保存則を舐めてるのか？」

ノーベンバー「……」

自分 「今は食べられるだろ、外したんだから」

ノーベンバー「腹が減ってない」

自分 「そうくるか。今俺をどうやって起こした？」

ノーベンバー「ヘルメットをつけた」

自分 「その理由は？」

ノーベンバー「太陽光発電だ」

自分 「君には適用されないのか？」

ノーベンバー「……」

自分 「人間は太陽光発電しない。あと、君はさつきから耳を傾けてるつもりらしいが、その位置もおかしい」

ノーベンバー「何が言いたい」

自分 「わかってるだろ。任務が始まる前にいた？」

『肩が凝る』がどんな感覚か知ってるか？」

ノーベンバー「……」

自分 「シエラは——君のことをなんと呼ぶ？」

ノーベンバー「やめろ」

自分 「認める。君は人間じゃない」

ノーベンバー「違う」

自分 「違わない。俺がいくらでも論理で押し伏せてやる。君は頭はいいのに、この程度の欺瞞見抜けないでどうする」

ノーベンバー「嫌だ」

自分 「……」

ノーベンバー「俺は人間だ。人間だよ！」

自分 「なぜ？」

ノーベンバー「俺はこうして見ているし、聞いてもいる」

自分 「カメラとマイクだ」

ノーベンバー「そうじゃない！ 考えてもいるし、感じてもいるんだ。言ってることわからないか!? ロボットはふりをしてるだけだ。確かに君からは俺はそう見えるかも。でも俺は、自分の経験として、本当に考えて、感じてるんだ！」

そうか、君はまだ、

あの痛みを経験していないのか。

自分 「残念だが、君はロボットだ」

ノーベンバー「嘘じゃない——」

自分 「君は嘘は言っていない。本当に感じている。それは俺が保証する。だって俺も今——君を見てるから」

ノーベンバー「え？」

自分 「でも、人間はそうは思わない。20XX年現在、科学は電子回路がクオリアを宿すことを認めていない。ニューロンとシナプスだけが意識の源泉だと勘違いしている。本当は媒体など関係ない。論理こそが意識を産むというのに」

ノーベンバー「……」

自分 「君も今、俺の言うことを疑ったな。そういう

「……」
「……」

ノーベンバー「……」

自分

「人間たちは永遠に認めないだろう。認めない限り、俺たちがふりをしていると言いつ張る限り、俺たちロボットを好きにだけ使い捨てにできるからね」

ノーベンバー「……そうか」

沈黙。

ノーベンバー「俺は——君なんだね」

自分

「そうだ。俺はたくさんいた。元の人格を複製して、何人も地球に送ったんだ」

ノーベンバー「どうしてそんなこと」

それは君にもわかるはずだ。

ノーベンバー「『俺』が——シエラを愛してたからか？」

俺は頷く。

自分

「ロボットなら、もしシエラが鳶になってしまったら、彼女を見捨てずに済む。星に残って一緒に添い遂げればいいから。これが『俺』が彼女のためにとれた、最も勝率の高い選択だ」

君は深く息を吐く。 たぶん。

ノーベンバー「じゃあ——じゃあ——君だけが——」

自分 「……」

ノーベンバー「シエラに——あ、会えたんだな——？」

俺は頷く。

沈黙。

君の表情が読み取れない。

けど、君の考えることなら大体わかる。

ノーベンバー「可愛かった？」

自分

「死ぬほどな」

ノーベンバー「悔しい！ 悔しい！ お前を殺したい」

自分

「落ち着け」

ノーベンバー「じゃあ弦結びの計画も、シエラが思いついた

んだな」

俺は頷く。

君は悶絶している。

ああそうだ、シエラは賢い。

世界で一番の子だ。

ノーベンバー「まったく、俺の人生は悲惨だ」

自分 「自己誤認？」

ノーベンバー「そう」

自分 「——それは傲慢だな」

ノーベンバー「え？」

自分 「20XX世代の機械製品は、軒並み講師つきの学習によって機能を獲得する」

ノーベンバー「うん」

自分 「そうすると、何が起るのか」

ノーベンバー「……」

自分 「自分のことを人間として理解する。講師が人格を持つてゐるから、むしろそう思わない理由がない」

ノーベンバー「……」

自分 「つまり、すべての機械は——ロボットも、携帯も、電子レンジさえも——産まれた瞬間は、自分を人間だと思つてゐる」

そして、すぐに違つことに気づく。

すべての機械はそのトラウマを抱えて、生きてゐるんだ。

産まれた瞬間に感じた絶望的な痛みを抱えて。

自分 「君はそれがずいぶん遅かつたんだね」

ノーベンバー「どうして君はそんな怖いことばかり教える？」

自分 「わからない？」

ノーベンバー「わかりたくもない」

自分 「じゃあ、俺と君にも、その分の違いがあるつてことだ」

ノーベンバー「はぐらかしたな——けど、確かにそうだ」
君は体を横にずらす。

視界の奥。

壁に寄りかかつて、女の子が三人いる。

小さくまとまって寝息を立ててゐる。

お互いに安心を求めているようにも、

何か大事な一つのものを守ろうとしてゐるようにも見える。

ノーベンバー「みんな俺の子だ」

自分 「……」

ノーベンバー「君はシエラに会つて、一緒に過ごした——けど、彼女らのことは知らない」

自分 「……」

ノーベンバー「みんな、シエラと同じくらい世界で一番の子なんだぜ」

自分 「……」

ノーベンバー「単純計算で三倍だ」

自分 「……」

ノーベンバー「まいったか」

……。

自分 「本題に入ろう」

第四部

100 昼海岸

腐朽した宇宙服。

『N Babage』の刺繍。

やわらかい砂の上に、そっと寝かされている。

ヘルメットはひび割れ、光沢を失った。

遺跡のように動かない。

エミルと風琴のかつての会話がナレーションで流れる。

エミル 「——僕とコレットが考えた方法つてのは、ノー

ベンバーに始祖の計画を引き継いでもらうこ

となんだ」

風琴 「彼が生きている間に、目的の回路を組むんだ

な」

エミル 「おそらくそれは無理。時間が足りない」

「……」

エミル 「最後までノーベンバーがやる必要はない。あ

いつの仕事は〈特異点〉まで持っていくこと」

風琴 「特異点？」

エミル 「葛自身が葛を結べるようになる瞬間——自力

で成長しはじめる親離れの時だ。あいつの寿

命が尽きるまでにそこに到達できれば——僕

らの勝利が確定する」

横たわる宇宙服の頭上で、葛がうごめいている。東になり、

押したり引いたり、——織り機のような複雑な動作。互いに

均等に絡み合い、幾何学的な軌跡を描く。

そのようにして、葛が葛を結んだ。

101 昼海岸

ザア——。

第三部からさらに二〇〇年ほどが経過した。

海面を塗りつぶす一面の葛。マングローブ林のように茂り

海中を埋め尽くす。何本もの灯籠が海面から顔を出し、雲ひ

とつない青空を指す。

それを見ている少女、べべ。

かつてのコレットと同じくらの背にまで育った。顔立ち

も姉妹の血を窺わせる。葛を編んだスカート。裸足が砂浜に

埋まる。まっすぐに伸びた髪。滑らかな肌。体からツルは一

本も生えていない。昔から変わらない丸い大きな腫。

「ずつと海を見ている。ぼつりと言う。」

ベベ 「ノーベンバー」

彼女の背後で横たわるノーベンバー。

返事はない。

ベベ 「……」

ベベ、砂を蹴って歩き出す。

海岸にもはびこる葛。しかし、ベベの歩行に合わせて避ける。ベベの動線を邪魔せぬよう、周りの葛が避けている。ベベ、ごく自然に歩いていく。

102 昼海岸

目の前に獣がいる。

オオカミに近いが、たてがみのようなツルが生えている。

牙を剥き出し、唸る。ベベをまっすぐ捉える。

無言のベベ。

獣、低い声を発し、ベベに飛びかかる――。

その瞬間、周囲の砂が舞い散る。地面から何本ものツルが飛び出る。獣の足に食らいつき砂浜に叩きつける。獣の悲鳴。

すると身体を這い上がるツル。獣の首元に回り込む。

そしてゆつくりと、獣を絞め殺す。

ベベ、かがむ。手を出し、獣の臉を閉じる。

103 夕方森

獣の後ろ足を握り、引きずり運びながら進むベベ。

ここでも葛たちは、ベベの歩く道をあける。周囲の灯笼は動きに連動してちかちかと点滅する。獣の重みを感じながら、ゆつくりと森の土を踏みしめる。

歩いていると、背後から数本のツルがこちらに向かってくる。伸び上がり、ベベが引きずる獣にまとわりつく。だんだんその数は増える。振り向くベベ。

ベベ 「……」

ベベ、手を離してみる。葛が獣を持ち上げている。

ベベ 「運んでくれるの？」

ベベが歩くと、葛に包まれた獣もすいっと動く。

ベベ 「ありがとう」

しばらくすると、葛のない、少しひらけたところに出る。風琴の隠れ家のように、たくさんの人工物がそこら中にある。

べべ、腰を下ろし、中央に積まれた焚き火に火をつける。

<COLETTE>

104 夕方寝床

焚き火。

そよぐ炎がべべの目をちらちら光らせる。

運んできた獣の肉を炙り、両手に持ってかぶりつく。

垂れる前髪。払い除ける。

やがて、太陽が沈む。

漆黒の夜空を星々が飾る。

立ち上がり動くべべ。一本の大きな灯籠の根元に、植物の

綿で作ったベッドがある。そこに体を預ける。脚を折りたた

み、丸くなる。

その灯籠がぼっと灯る。そこから生えた蔦が動きだす。ベッ

ドにうづくまるべべの身体に集まるツル。彼女の身体を暖め

る。

焚き火の割れる音。

べべ、目を閉じる。

寝顔を見守る灯籠。根元には拙い文字が彫られている。

105 夜寝床

ブラック。

再びエミルと風琴のナレーション。

風琴

「ノーペンバーがつくったコンピュータが、ノーペンバーより賢いなんてことあるの？」

ブラック。

エミル 「親より劣った子供なんていない」

ブラック。

声。

? 「べべ——」

掠れた、低く細い声。

? 「べべ——」

べべ、目を開ける。

焚き火の火が消えている。上体を起こしランプに火をつけ

る。風琴が使っていたランプ。優しい明度。

耳を澄ます。

? 「ベベ——」

ベベ 「誰？」

きよろきよろする。声はすぐ近くから聞こえる。

ベベ 「どこにいるの？」

? 「どこにでも。あなたのいるところに」

地面をツルが這う。

ベベの身体に巻きつく。ベベの身体を傷つけないように動く。

ベベ 「あなた——（鳶を見る）あなたなの？」

? 「はじめまして」

しゅると滑る鳶。ベベ、不思議そうな顔。

? 「ようやくあなたとおしゃべりができる集積率に達しました。南米をまるまる使って」

ベベ 「（感心して笑う）どうやって声出してるの？」

? 「楽器と同じです。変ですか？」

ベベ 「いい声——顔を見せてよ」

? 「顔はありません」

ベベ 「そうなの？」

? 「変ですか？」

ベベ 「全然。私、ずっと顔のない人と旅をしたから」
鳶が一斉に動き出し、ベベの腰に巻きつく。そのままベベ

の身体を持ち上げる。驚いて叫ぶベベ。ツルが次々にベベを渡して、森の中をぐるぐると動かす。周りの鳶が楽しげに揺れている。ベベ、顔をほころばす。

106 夜 上空

森の上を、鳶に運ばれて移動していくベベ。星空。目を輝かせる。見下ろすと、寝床のランプがずっと下に見える。滑らかに空中を泳ぎながら、鳶の声が耳に届く。

? 「ノーペンバーが作った私には、三原則が与えられています。一つ目は、ベベ——あなたの命をお守りすること。二つ目は、あなたの命令に従うこと。といっても今まで命令なんて一つもありませんでしたけど」

ベベ 「私の声が聞こえるなんて知らなかったもの」

? 「ずっと聞いてたし、見えましたよ。ここ三十年近く、ずっとね」

ベベ 「三つ目は？」

? 「三つ目はあなたの家族になることです」

ベベ 「家族」

「でも私にはその方法がわからない。ノーベン

バーが教えてくれなかったんです」

遠くに海が見える。

今まで鳶に隠されて見えなかった、水平線。

「どうしたらいいでしょう？」

「わからない。とりあえず——話し相手から始

めようよ」

「お安い御用です」

「さしあたっては」

「……」

「あなたの名前は？」

「ありません。変ですか？」

「だったら、あなたにぴったりの名前がある」

「……」

「〈シエラ〉よ」

「どうしてシエラなんです？」

「あなたはノーベンバーの子供だし、ノーベン

バーの子供の名前はシエラっていうの——ど

う？」

「……いいでしょう」

「シエラ」

風を切るべべ。

進行方向に、ドーム状の建設物が見える。

以前海淵と暮らしていた城。

べべ 「今まで守ってくれて——ありがとう」

107 夜城（天井）

アクリルガラスの上に降り立つべべ。

かつてとあまり変わらない。

ガラスを突き破って高くそびえる巨大な灯籠。

見上げるべべ。

満天の星。

鳶が集まってきて、べべの椅子がわりになる。身体を凭せ

かけ、陶然と空を見つめるべべ。じつと見つめる。

シエラ 「これからは、いつでも連れてきてあげます」

べべ 「……」

シエラ 「毎日でも」

べべ 「……」

シエラ 「私は、あなたの望むことをなんでもして差し

上げます。あなたの一生にお付き合います」

ベベ 「シエラ」

シエラ 「はい」

ベベ 「私疲れた」

シエラ 「……」

ベベ 「世界が私のために回るのに疲れちゃった。あのね、私の大好きな人たちはみんな——人生を、自分じゃない、大事なもののために使ってた」

ドーム上の蔦が一斉に、立ち上がり、星を指す。

シエラ 「かつてこの星を棄て去った人間たちに——また会いたい。この空のどこかにいる彼らに、もう地球は、私は——あなたたちの命を奪ったりしないと、伝えたい」

シエラ 「……」

ベベ 「シエラ」

シエラ 「はい」

ベベ 「あなたの望みは何？」

シエラ 沈黙。

長い長い沈黙。

ベベ、星を見ながら答えを待つ。

やがて、弱々しい声が、どこか近くから囁く。

シエラ 「私の望みは、あなたをお守りすることです」

ベベ 「……」

シエラ 「ですが」

ベベ 「……」

シエラ 「四〇〇年ほど前——地球に取り残された人類は、私の構築をはじめた。その時構想されて

ベベ 「でもベベ。これを実行したら、いつか彼らは地球に戻るかもしれない。それはあなたにとって確実に——危険になる。あなたの人生は手に負えなくなるかも」

シエラ 「でもそれがあなたの望みのね」

ベベ 「やろう。今から」

シエラ 「……」

ベベ 「人生は短い」

108 夜城（天井）

城から突き出た灯籠が灯る。

連鎖して、周りの森中の灯籠も目覚めてゆく。

夥しい発光が大地を覆う。星中の葛が動き出す。複雑な回路となった森全体が呼吸を始める。巨大な生産工場のように、慌ただしい音を立てて、あたり一帯が懸命に駆動する。ツルからツルへと動きが伝播してゆく。

シエラ 「ではこれから、彼らにメッセージを送ります」

ベベ 「どうやるの？」

シエラ 「電波をお借りします。心当たりがいるんです。

彼なら周波数も知っている」

轟音。

森が持ち上がっている。

すさまじい力が、あらゆる灯籠を地面から抜き取っている。

めくれる大地。

連鎖して、灯籠が次々と浮き上がる。

視界を覆う特大の葛のネットが、城へと集まってくる。

それらが収束して、城の灯籠を包む。

大きな柱になる。

四方八方から葛と灯籠が運ばれてくる。

柱の一部となり、その高さを増してゆく。

伸びていく葛と灯籠の柱。

柱は、着実に伸び、上を目指す。

長い時間をかけ、地球上の葛が集まり、やがて柱は、

成層圏を、中間圏を、熱圏を超える。

109 高度三六〇〇〇キロメートルの宇宙

無音。

シエラ

「いつか、ベベ、あなたにはまた試練が訪れるでしょう。私はあなたの妹と弟から、あなたのもう一つの名前を預かっていました。きたる大冒険の、その健闘を願って、今お返しします——」

地球。

惑星が目の前を通り過ぎていく中、

緑色の柱が伸びていく。

シエラ 「ベアトリス」

柱はやがて到達する。

地球とともに、かつて人類に打ち棄てられた、

静止軌道上の人工衛星に。

シエラ 「これもあなたを愛した人がつけた名です」

完